

学内広報

2024.4.23

no.1581



令和6年度学部入学式で祝辞を述べる米田あゆ様



令和6年度役員等の紹介
令和5年度卒業式・学位記授与式
令和6年度学部入学式・大学院入学式
SOGIガイドラインについて

令和6年度役員等の紹介

総長

藤井 輝夫

理事・副学長

相原 博昭 経営企画、予算配分、教員人事、施設
齊藤 延人 研究、懲戒、病院
森山 工 教育、情報
藤垣 裕子 学生支援、入試・高大接続、評価、研究倫理
林 香里 国際、ダイバーシティ&インクルージョン
津田 敦 総務、150周年記念事業、社会連携・産学官協創

理事

菅野 暁 財務(CFO)、資産活用
角田 喜彦 事務組織、人事労務、法務、コンプライアンス
岩村 水樹 コミュニケーション戦略

監事

吉田 民
棚橋 元

執行役・副学長

浅見 泰司 教育基盤
太田 邦史 総長室、学術長期構想、入試企画
河村 知彦 コミュニケーション戦略推進
岸 利治 研究力強化、環境安全、監査、利益相反
佐藤 岩夫 ガバナンス改革
佐藤 健二 学術資産活用戦略
染谷 隆夫 産学協創、スタートアップ
田浦 健次朗 DX推進、情報システム
出口 敦 施設・資産活用企画、GX推進

執行役

福島 毅 資金運用(CIO)
三島 龍 渉外・卒業生(CDO)

副学長

秋山 聡 地域連携推進、渉外活動推進
伊藤 たかね ダイバーシティ教育、多様性包摂共創センター、SOGI多様性
大橋 弘 産学協創、人文社会科学組織連携、研究インテリジェンス推進
岡部 繁男 生命系国際協創、ライフサイエンスイノベーション、WPI(IRCIN)
岡部 徹 渉外活動推進、経済安全保障推進
支田 有史 人文社会科学研究力強化
坂井 修一 図書館
佐久間 一郎 産学協創推進、医工学イノベーション
堤 伸浩 GX連携
星 岳雄 東京カレッジ、国際就業体験、国際エグゼクティブ教育
矢口 祐人 グローバル教育センター、CoD設置準備
吉江 尚子 ダイバーシティ研究環境実現
渡部 俊也 出資事業、経済安全保障、安全保障輸出管理

副理事

遠藤 勝之 研究推進、研究倫理、研究費・研究不正対応
藤山 達矢 教育・学生支援
小寺 孝幸 HR経営
桜井 明 社会連携・産学官協創
高橋 喜博 総長業務支援統括
松井 正一 ダイバーシティ&インクルージョン推進
水上 順一 柏地区事務機構長、DX推進、イノベーションコリドー
山本 貴史 社会人教育

総長特別参与

大久保 達也 GX推進および体制整備
沖 大幹 GX国際連携、GX教育
喜連川 優 DX推進戦略
坂田 一郎 ビジョン形成、アントレプレナーシップ教育推進

総長特使

石井 菜穂子 Global Commons(グローバルコモンズ)
道田 豊 The UN Ocean Decade(国連海洋科学の10年)

総長特任補佐(副学長待遇)

大越 慎一 大学院改革

総長特任補佐

有馬 孝尚 財務改革、総長ビジョン検討、IR
五十嵐 圭日子 社会連携・産学協創推進
石井 健 生命系国際協創推進
和泉 潔 スタートアップ支援推進
稲見 昌彦 図書館DX推進、クリエイター教育推進
岩田 覚 総長ビジョン検討
岩田 忠久 産学協創推進
江頭 正人 社会連携教育推進
川崎 雅司 研究力強化推進
北村 友人 国際戦略企画
佐藤 仁 GX国際連携推進
鈴木 綾 社会起業推進
菅野 智子 スタートアップエコシステム構築、知財活用戦略
高橋 浩之 イノベーション戦略
津本 浩平 産学協創・研究力強化
鶴見 太郎 総長ビジョン検討
中尾 彰宏 次世代サイバーインフラ活用、産学協創推進
額賀 美紗子 入試企画
ペニンントン マイルス デザインビジョン、CoD設置準備推進
福留 東土 学術長期構想検討、CoD設置準備推進
松田 陽 学術資産活用推進、150周年記念事業推進
求 幸年 起業家教育の国際化
両角 亜希子 総長ビジョン検討、新しい大学モデル構想推進
割澤 伸一 産学協創・社会連携推進、イノベーションコリドー推進

新役員等の略歴と就任挨拶

みずからの個性を發揮する学生を育む

2021年度の東京大学入学式で教養学部長として式辞を述べたわたしは、聖アウグスティヌスのことばを引用しました。それは、もし万物がみな同じであったなら、万物は存在しないことになるであろうということばでした。

ここには万物の多様性が語られています。あなたとわたしが同一であったなら、あなたもわたしも存在しないことになる。あなたが存在し、わたしが存在するためには、あなたとわたしとの非同一性が必要である。これを万物に敷衍して述べれば、そこには万物の多様性が必要である。

このたび、教育と情報を担当として、理事・副学長に就任しました。本学における研究の多様性。これについては論を待ちません。他方で教育、とくに学部教育については、学生の同質化傾向が夙に論じられてきました。

わたしが構想するのは、同質化傾向に屈することなく、前期課程・後期課程・大学院を通じて、みずからの個性を發揮しようとする学生を育むことです。他者と同一であるがゆえに存在しないことになってしまうのではなく、他者と違うからこそみずからも、そして他者をも独自の存在として活かすことができるような学生を育成することです。

たんなる雑多なものの寄せ集めでなく、それが活力となるような多様性。そういう学生を育むために、どのような教育と、それを支える制度的な基盤が必要なのか。そしてまた、そのような教育を施すためには、どのような情報施策を構想し、実現すべきなのか。UTokyo Compassに沿った中長期的な観点から考えたいと思います。

理事・副学長

森山 工
MORIYAMA Takumi



昭和59年3月 本学教養学部教養学科卒業
昭和61年3月 本学社会学研究科修士課程修了
平成6年3月 本学総合文化研究科博士課程単位取得退学
平成6年7月 本学総合文化研究科博士課程修了、博士(学術)
平成12年4月 本学総合文化研究科助教授
平成24年4月 本学総合文化研究科教授
令和3年4月 本学総合文化研究科長・教養学部長
令和5年4月 本学執行役・副学長
専門分野: 文化人類学研究
研究内容: 1) 森山 工 「贈与と聖物——マルセル・モース『贈与論』とマダガスカルの実践」東京大学出版会、2021年。
2) 森山 工 「『贈与論』の思想——マルセル・モースと〈混ざりあい〉の倫理」インスクリプト、2022年。

「大学経営の高度化」に向けて

このたび財務（CFO（最高財務責任者）および資産活用担当の理事職を拝命しました。昨年8月1日に執行役CFOとして着任してから、新しい財務経営体制、またその中におけるCFOの役割とは何かという課題について考えてきました。欧米アジア主要大学の体制を調査し、また本学が目指すエンダウメント型経営を既実践しているスタンフォード等米国の主要5大学を訪れ、CFO、プロボスト（最高教学責任者）等と行った議論をベースに検討してきましたが、4月1日付で新たにCFOオフィスを立て上げ、体制整備については一区切りがつかしました。これからは実践のステージに入り、4月に改訂されたUTokyo Compass (ver.2.0)における「自律的で創造的な大学モデルの構築」を、

財務経営の高度化を実現することによって推進することになります。私の経歴について簡単に述べますと、41年の長きにわたってみずほフィナンシャルグループにおいて資産運用業務や国際業務に従事してきました。また直近の5年間は経営全般に携わってきました。昨年8月に東京大学に戻ってきた機会を利用して、素晴らしい先生方と一緒に仕事をし、またその著書を拝読したりすることで、東京大学という恵まれた環境で仕事ができることを存分に楽しんでいきます。経済・社会情勢の変化が激しい中、足元の厳しい財務状況を跳ね返し、東京大学の研究・教育における国際的な競争力を向上させることに、安定した財務経営の実現を通じて貢献できれば幸いです。

理事

菅野 暁

SUGANO Akira



昭和57年3月 本学経済学部卒業
昭和57年4月 (株)日本興業銀行（現・みずほ銀行） 入行
昭和61年6月 マサチューセッツ工科大学経営大学院 修了（経営学専攻）
平成24年4月 (株)みずほ銀行・(株)みずほコーポレート銀行常務執行役員 投資銀行ユニット長兼アセットマネジメントユニット長
平成26年6月 (株)みずほフィナンシャルグループ執行役専務 国際・投資銀行・運用戦略・経営管理統括
平成28年4月 同グループ執行役専務 グローバルコーポレートカンパニー長
平成29年4月 同グループ執行役副社長
平成30年4月 アセットマネジメントOne (株)代表取締役社長
令和5年8月 本学執行役
趣味：農家に泊まりながら農村を旅すること

誰もが参加したくなるDX / DX Everyone Wants to Join

大学の情報システム、DX推進担当の執行役・副学長を拝命しました。現在、情報技術は大学のすべての教職員の業務に入り込んでおり、業務の生産性や生活の質向上のためにDXが必須になっています。構成員全員が自分の生産性と生活の質向上のために仕事のやり方を考え、試し、変えていくことが大事です。また、同じやり方やツールが他の部署や部局でも使えたり、全学でやり方を一斉に変えないと意味がないというようなことも多いですから、自分の所属部署と関係ないから、というような視野の狭い考え方を廃して、意欲と能力のある人が所属や職位に限らず参加、協力していけ、貢献者が報われる仕組みが必要です。そうなるために尽力したいと思います。情報基盤センター年報 巻頭言 <https://tinyurl.com/dx-itc-report> にも書いているのでもしよろしければご覧ください。

I have been honored with the role of Executive Officer and Vice President, leading the Information Systems and Digital Transformation (DX) initiatives at our university. Nowadays, information technology has become a fundamental part of the work for all faculty and staff, and DX is indispensable for enhancing both productivity and quality of life. It's essential for every member to rethink their workflow, try/adapt new ways to improve their own productivity and quality of life. Often, the same methods and tools are applicable to other departments and faculties, and/or a university-wide change must be implemented for real impact. Hence, it is vital to abandon narrow-minded thinking based on your affiliation, encourage people with the passion and capability to participate and collaborate regardless of their position or department, and reward contributors. I will do my best towards this end. Please also take a look at my foreword in the Information Technology Center Annual Report for further thoughts: <https://tinyurl.com/dx-itc-report>.

執行役・副学長

田浦 健次郎

TAURA Kenjiro



平成4年3月 本学理学部卒業
平成6年3月 本学理学系研究科修士課程修了
平成8年6月 同博士課程退学、同助手
平成9年7月 理学博士（論文）取得
平成11年7月 米国カリフォルニア大サンディエゴ校 客員研究者（在外研究員）
平成13年4月 本学情報理工学系研究科講師
平成14年4月 同助教授
平成27年4月 同教授
平成30年4月 情報基盤センター長
専門分野：並列処理、プログラミング言語、高性能計算
研究内容：1) Toyotaro Suzumura 他31人: "mdx: A cloud platform for supporting data science and cross-disciplinary research collaborations" 2022 IEEE Intl Conf on Dependable, Autonomic and Secure Computing, Intl Conf on Pervasive Intelligence and Computing, Intl Conf on Cloud and Big Data Computing, Intl Conf on Cyber Science and Technology Congress (DASC/PiCom/CBDCom/CyberSciTech)(2022)1-7. 2) Shumpei Shiina, Kenjiro Taura: "Itoyori: Reconciling Global Address Space and Global Fork-Join Task Parallelism" Proceedings of the International Conference for High Performance Computing, Networking, Storage and Analysis(2023)1-15.
趣味：MLB、NFL、CNN鑑賞、プログラミング

大学独自基金で次なる「学知」の創出へ

このたび、渉外・卒業生を担当する執行役を拝命しました。150周年まで3年という時期のCDO就任に緊張を感じながらも、母校の新しい大学モデル構築に参画できるワクワク感を強く感じています。

令和元年9月より渉外部門長としてファンドレイジングに携わってきましたが、本学が掲げるビジョンを実行に移すには一層の財務力強化が不可欠です。今回の任に当たり、渉外部門のファンドレイザーのみならず、部局や本部のみならず全員がOne Teamとなってファンドレイジングに取り組むような学内文化や仕組みづくりに取り組むと考えています。

学外の方々から支持を得るには、本学の現状や目指す姿を知っていただく必要があります。

私自身、民間にいた時には母校がこのような財政的状况に置かれていることを知りませんでした。卒業生を始めとする多様なステークホルダーとの対話を継続し、本学への支持や共感を増進して、結果として大学独自基金の拡充を図ります。また、前職での経験を活かした財源の多様化にも取り組みたいと思います。CFOやCVOと協働して本学の持つ見えない価値を財源に接続する取り組みにも注力します。

150周年事業やCollege of Designなどの大型プロジェクトを控え、UTokyo Compassに掲げる経営力の確立に貢献すべく、みなさまと協力しながら任務遂行に全力を尽くす所存です。どうぞよろしくお願いたします。



執行役

三島 龍

MISHIMA Ryu

昭和63年3月 本学経済学部経営学科卒業
昭和63年4月 JPMorgan入社（東京・ニューヨーク・ロンドンにて勤務）以後、モルガン・スタンレー、ドイツ証券、BNPパリバにて資本市場・投資銀行業務に従事
平成24年8月 フリーランス（VC・海外証券会社顧問・ネールサロン経営など）
令和元年9月 本学社会連携本部渉外部門長
専門分野：金融・ファイナンス
趣味：ゴルフ、モータースポーツ・格闘技観戦、旅行

制約を独創性に転換する

かつて本学の総長特任補佐もつとめた小森田秋夫名誉教授は、人文社会科学（いわゆる文系）とは、ヒトならぬ人間とそれが構成する社会を対象とする学問全般であるとしています。そして研究対象としての人間も社会も、特定の時代（時間）と地域（空間）という「文脈」のもとにおいてのみ存在する点に、学問としての特徴を見出しています。さらにその文脈による制約こそが、研究の固有性と同時に、相対化を媒介とした普遍性の創出につながると述べています。

今回、人文社会科学研究力強化を担当することになりました。最初に申し上げたいのは、本学の人文社会科学は既に卓越した高い研究力を発揮しているということです。そのうえで研究力を強化していくには、さまざまな難関に挑戦

していく必要があります。

具体的には、しばしば指摘される研究時間の確保はもちろんのこと、適度な研究資金の切れ目のない獲得、安定的な研究インフラの整備、多彩な若手研究者の養成、納得性のある研究評価の確立などが、さしあたり課題として考えられます。いずれも自然科学を含む部局と構成員のみなさんとの対話と探索なしには、到底乗り越えられないものばかりです。まずは御用聞きとして広く意見をうかがうことから始める所存です。それは仕事ではありませんが、同時に楽しみでもあります。

制約を独創性に転換していく東京大学の人文社会科学の持続的発展のために尽力しますので、どうぞお力をお貸しください。



副学長

玄田 有史

GENDA Yuji

昭和63年3月 本学経済学部卒業
平成4年3月 本学経済学研究科第Ⅱ種博士課程退学
平成14年4月 本学社会科学研究所助教授
平成19年4月 本学社会科学研究所教授
令和3年4月 本学社会科学研究所長
専門分野：労働経済学
研究内容：1) 玄田有史「仕事のなかの曖昧な不安」中央公論新社、2001年。2) Genda, Yuji, Kondo, Ayako & Ohta, Souichi. "Long-term Effects of a Recession at Labor Market Entry in Japan and the United States." *Journal of Human Resources* 45 (2010):157-196.
趣味：立ち食い蕎麦、ラジオ

社会と共に夢咲く未来を創る

このたび、副理事として、社会連携と産学官協創を担当することになりました櫻井です。

社会には、今すぐに解決することが難しい、大きな課題が数多くあります。報道や日々の生活からそのことを切実に感じます。

社会の課題の解決には、多くの時間や労力がかかるのかもしれませんが、社会に属する地域の方々、企業や官庁など様々な組織の方々、また、私たち大学などの教育研究機関も交え、多くの人たちが繋がることで、解決へ導く大きな力が生み出せるものと信じております。

本学の知を還元し、社会との融合から新たなイノベーションを生み出すことで、だれもが平和で生きやすい世界が実現されることを希望し

ます。私は、本学でそれを目指したすばらしい取組に関わることができることを誇りに思い、とても「ワクワク」しております。

また、このことの実現には、まずは大学の教職員の皆様「元氣」であるべきです。私は、30年以上、本学で事務の仕事をして参りましたので、特に事務職員の皆様には「元氣」に仕事に取り組んでいただくことを願います。そのことも踏まえ、私は教職員の皆様と積極的にコミュニケーションを図っていきたくと考えております。どうぞよろしくお願申し上げます。

私は、夢咲く未来の創出に努めていく所存です。重責を果たすため、精一杯がんばります！



副理事

櫻井 明

SAKURAI Akira

平成4年3月 本学採用
平成24年4月 本学工学系・情報理工学系等財務課長
平成27年4月 本学財務部決算課長
平成30年4月 本学ニューロインテリジェンス国際研究機構事務長
令和3年4月 本学工学系・情報理工学系等事務部長
趣味：サックス、編み物、自転車

退任の挨拶

10年を振り返り

五神前総長の最終年度と藤井総長の任期前半の計4年間、理事・副学長を務めました。着任前は工学系正副研究科長を6年務めましたので、都合10年間、本学の管理・運営そして経営に関わらせていただきました。

研究科長の任期が終わる2020年当初、世界中で新型コロナウイルスによるパンデミックが始まりました。本部での初年度は、教育、学生支援、施設、情報を担当しましたので、最初の仕事は大学のリアルな活動をオンラインで継続することでした。各部局と連携しながら、授業や会議をはじめとするあらゆる活動をオンライン化することに注力しました。藤井総長のもとでは学生支援を離れ、総務が加わり、危機管理担当、新型コロナウイルス対策タスクフォース座長として、引

大学からグローバル・コモンズを守る

今我々は、現在の経済システムが地球のキャパシティと衝突し、人類文明の寄つてたつところである弾力的で安定的な地球——「グローバル・コモンズ」——を失うという危機的状況にあります。これを回避するには、抜本的な経済社会システムの転換が必要です。今の世界には、グローバル・コモンズを統治するグローバルなメカニズムはありませんが、その仕組みを考え、システム転換をめざそうという大きな動きが、国際的にはあります。日本においては、アカデミアが社会を駆動することによって、その中核的な役割を果たすことができると考え、2020年8月に理事に就任して以来、「グローバル・コモン

部局の力を全学の力に

法学政治学研究科長を退任後、2年間、執行役・副学長として、ガバナンス改革、利益相反、監査を担当しました。部局の側から大学本部の側に立場を移し、戸惑うことも少なくありませんでしたが、東京大学のような大規模な総合大学は、基礎単位となる部局の力が十分に発揮されてこそ、大学全体のパフォーマンスも高まると信じ、そのようなスタンスで、様々な課題と向き合うよう努めたつもりです。

UTokyo Compassが掲げる「新しい大学モデル」の実現に向け「国際卓越研究大学」の枠組みを活用するという基本方針の下、その認定要件を踏まえつつ、東京大学らしいガバナンス改革を実現することが私に与えられた最重要のミッションでしたが、遺憾ながら、道半ばで終わりました。最後に1つできたことがあるとすれば、国立大学法人

多様な時間軸を持つ卓越性とグローバルキャンパス

東京大学が牽引役となるべき多様な国際化にかかわる活動に、7年間に渡り副学長として携わることができました。大きな変革を成し遂げつつある東京大学の中では微々たる活動でありながらも、組織や構成員の柔軟性をうまく生かして、新たな価値の創出とそのため将来への多くの「種を蒔く」ことに貢献できたとすれば、望外の喜びです。ご参画いただいた多くの教職員と学生に対して、さらに学内外から多大なご支援をいただきました皆様にも深く感謝を申し上げます。

戦略的なパートナーシップ大学等との分野を東ねた交流の促進は、

前理事・副学長

大久保達也

き続き最前線に対応にあたりました。パンデミックがいつ収束するか、誰もかわからない厳しい闘いでしたが、退任と同じタイミングでタスクフォースを解散できたことを感慨深く思います。

この3年間は、総務、施設に加え、GX推進とオープンイノベーションも担当しました。任期前半はコロナ対応を含め、ブレーキを踏む活動が中心でしたが、後半は私が得意とするアクセルを踏む活動も増えました。

4月からは工学系に戻りますが、総長特別参与として、引き続きGX推進および体制整備を担当します。これまでの活動は、いずれも全構成員との連携なしには成し遂げられないものでした。この貴重な経験を踏まえ、引き続き、本学の、そして地域、国、世界の未来に向け、貢献できればと気持ちを新たにしています。

前理事

石井菜穂子

ズ」推進の活動に努めてまいりました。この間、海外研究パートナーの間で行ったリサーチを梃として、どのように国内展開していくかという活動をしてきました。国際的な環境では容易に思われたことが、日本国内では様々な障壁に阻まれて思うような結果に結びつかないこともあります。これも変革に向けてのプロセスの一環なのであろうと思います。

新年度からは「グローバル・コモンズ担当総長特使」として皆様とともに励んでいきたいと思っております。引き続きよろしくお願ひ致します。

前執行役・副学長

大澤 裕

法改正により一定規模以上の国立大学法人に設置が義務付けられることとなった「運営方針会議」について、透明性と包摂性を備えた全学的な設置検討の場として、「運営方針会議設置検討タスクフォース」を立ち上げたことです。年度末となる3月29日(金)に行われたその第1回会議が、私にとって執行役・副学長としても、東京大学教員としても、最後の仕事となりました。

4月以降は外部からとはなりますが、引き続き、東京大学の発展を見守りたいと思います。総長をはじめとする役員の皆様、部局長をはじめとする教員の皆様、そして何より本部の事務職員の皆様を支えられた2年間でした。心より感謝申し上げます。

前副学長

関村直人

研究、教育、社会貢献といった切り口ではない新たな創発を生み出しつつあります。戦略的パートナーシップの意義について多くの大学が深い理解と共感を持っていただいたことには、感謝を超えて驚きです。例えばケンブリッジ大学では、800年を超える歴史が育んできた大学の文化に基づきつつも、分野を超えた交流を進展させていくことへの強い意欲を感じました。多様な時間軸と専門性を包含して変化するグローバル社会の中で、東京大学が卓越性を発揮して、ネットワークのハブとしてさらに成長していくことを祈念しております。

地域と卒業生とのネットワーク

2021年に卒業生と地域連携担当の副学長を拝命し、その後、企業との協創活動運営も加わり、社会連携本部と産学協創推進本部が所掌する業務に関わらせていただきました。その中でも卒業生担当として、全国各地の地域同窓会やニューヨーク銀杏会の総会での同窓生の皆様との交流はとても有意義な時間でした。海外の同窓会の皆様とは、ホームカミングデイのイベントでも交流させていただき、たくさんの刺激を受けました。2027年の東京大学創立150周年に向けた同窓生の皆様のご理解の促進にわずかでも貢献できておりましたら幸いです。

前副学長

丹下 健

地域連携では、公開シンポジウムを企画・開催いたしました。地域連携は、大学の社会貢献であるとともに、大学の教育研究が社会によって支えられていることを、強く認識する機会でもありました。協創活動運営では、2022年から株式会社クボタとの協創事業のコーディネータを務めさせていただきました。企業との協創事業推進に向けた全学体制強化に向けた検討にも参画させていただきました。

この間の副学長としての活動では、教職員の皆様に多大なご理解・ご支援をいただきました。心よりお礼申し上げます。

学外組織との協働による知のプラットフォームでの活動

この2年、イノベーションコリドー、国際協創、放射光施設担当として、本学と学外組織との連携活動に取り組んできました。

つくば-柏-本郷イノベーションコリドーでは、産学官民のハブ拠点として、学融合・産学連携研究活動を展開しています。特に、2009年よりTIA（つくばイノベーションアリーナ）で、大学、国立研究開発法人、大学共同利用機関の枠を超えた連携活動が展開され、技術研究組合最先端半導体技術センター（LSTC）の設立に繋がりました。今年4月からは、「TIA連携」として再スタートし、新しい知の創造と産業界への橋渡しを目指し、本学と他機関の研究者の共同提案

前副学長

森 初果

を支援する「かけはし」事業や人材育成の取り組みが、新しい体制で継続される予定です。

また、新しい放射光施設ナノテラスも昨年12月に無事ファーストビームを達成して4月より本格稼働となり、東北大学との協定の中で、東京大学シンクロトン放射光仙台分室での活動を展開しております。

各活動がこの4月から新しいスタートを迎えておりますが、この2年間お世話になりました本部役員、教員及び職員の皆様に心より御礼を申し上げます。

「誰もが来たくなる大学」を目指して

2019年4月より副理事として5年間勤めてまいりました。この間、柏地区事務機構長や産学協創部長を兼ねて業務を行い、多くの方々にお世話になりました。学内外の人々との対話を通じて学知を共有し、新たな知の創出により社会課題の解決につなげるという理念のもと、ビジョンを共有し組織間で連携するという「産学協創」を推進することは、東京大学の新たな取り組みであり刺激的な事柄でもありました。日立、ダイキン工業、ソフトバンク、三井不動産、日本ペイント、IBM、住友林業、TCS、クボタ、三菱地所、JR東日本、キヤノン・キヤノンメディカルシステムズとの産学協創事業の

前副理事

稲垣 博明

ほか、日立-ICL-東大のクリーンテック・イノベーション創出に関する連携、金融庁やNHKとの包括連携、Microsoftとのパートナーシップ、TSMCとの半導体アライアンス、IBM-シカゴ大学-東大、Google-シカゴ大学-東大の量子分野のパートナーシップなど、先端研究領域における産学官のゲートウェイとしての機能を発揮する事業も数々経験することができました。関係させていただいた事業の推進がUTokyo Compassの推進に少なからず寄与できたとすれば、望外の喜びであります。「誰もが来たくなる大学」を目指し益々発展されますことを祈念いたします。

新たな財務経営に期待して

1990年4月に東京大学旧経理部に赴任し、2019年4月に経理・調達担当の副理事を拝命し、本年3月末をもって退任いたしました。

この間約34年間は、事務（部）長時代を除き、主に財務、執行関係の業務に携わり、副理事の5年間は特に調達関連の業務における業務システムの運用の向上の取り組みを行ってまいりました。

その中で旅費システムの更新については、利用率向上のためより使いやすいシステムを目標に公募実施委員会の委員長として各委員のもと議論し、新たな業者のもと更新できたことは、思い出深い事柄です。なお、運用直前に起きた新型コロナウイルスの蔓延によりその利用率

前副理事

戸張 勝之

が当初予定をかなり下回りその評価が十分にできなかったことは残念なことでしたが、コロナの終息に伴い、そして新たなサービス等の構築により利用が増えてきたことにほっとしました。

現在、財務関係において、組織としてCFO室の設置、事務業務としてDXを目指した財務会計システムの更新など新たな財務業務に向けた取り組みが始まっています。

これらの取り組みより、本学の働き方改革の向上や財務運営が国立大学の旗艦大学となることを祈念して、退任の挨拶とさせていただきます。

令和5年度学位記授与式

東京大学学位記授与式



令和5年度学位記授与式が、3月21日(木)に、安田講堂において行われました。今年度の学位記授与式は、第一部・第二部・第三部の3回に分けて行われ、音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「ディベルティメント ニ長調 K.136」の演奏の流れる中、藤井輝夫総長をはじめ、理事・副学長、各研究科長並びに来賓の宗岡正二 東京大学校友会会長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。総長から各研究

科の修了者代表に学位記が授与され、修了者に向けて告辞が述べられた後、来賓の宗岡校友会会長から祝辞をいただきました。その後、修了生総代(第一部:公共政策学教育部 名和宏晃さん、第二部:薬学系研究科 伊藤慶さん、第三部:情報理工学系研究科 江田尚弘さん)から答辞が述べられ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、修了者とそのご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

総長告辞



本日、東京大学で学位を受けられるみなさん、おめでとうございます。みなさんの努力と成長は、私たち教職員の大きな誇りです。みなさんに心よりお祝いを申し上げるとともに、支えてくれたご家族の方々にも感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

人生100年時代と言われますが、長い人生を意義深いものとするためには、好奇心を持ち続け、常に新しく学び、探究を深めていくことが、ますます大事になってきています。みなさんが東京大学の門を出て新たな挑戦へと踏み出すいま、他者とともに自ら学び続けることの大切さについて、お話したいと思います。

テクノロジーの発展と学びの進化は密接な関係にあります。その一例が、ゲーテンベルクによる活版印刷技術の発明と定着です。西洋印刷史を研究したエリザベス・アイゼンステインの『印刷革命』は、この複製技術による量産が、ヨーロッパにおける書物の価格を引き下げて、これを広く普及させ、テキストを綿密に比較照合する文献学をはじめ、ルネサンスのさまざまな学問を生み出した、と論じています。そして正確な図版の共有は算術、幾何、音楽、天文学の四学芸を飛躍的に発展させました。

20世紀に入ると、ラジオやテレビなどの放送技術の開発が進みます。知識や情報をより広範囲に拡散する役割を果たすとともに、マスメディアとしての一方向的な情報伝達が主流となりました。この環境を大きく変えたのが、インターネットの普及です。情報の双方向的な流れが開かれ、個人はただ受信するだけでなく、積極的に発信も受信することが可能になります。テクノロジーは、人間が生きる時空を変容させましたが、それは学びのプロセスと環境が大きく変わったことを意味するものでもあります。

そこで重要なのは、学ぶ目的であり、目指すべき理想であり、倫理観です。テクノロジ

ーはツールであり、その使い方も方向性も私たち人間の手に委ねられています。生成AIは質問すれば即座に回答してくれますが、学習したビッグデータと入力された文字情報をもとに計算を実行しただけですから、人間から見ると偏見や誤解を含み、誤った断定が出力として返ってくる可能性もあります。だからこそ、私たちの批判的思考と注意深い判断が必要不可欠です。未来を形作るのは、AIのようなテクノロジーそのものではなく、それを使う私たちのビジョンであり、倫理であり、意志であることを忘れないでください。倫理的かつ責任ある使い方を心がけるとともに、テクノロジーのポジティブな可能性を最大限に引き出して、人間性を豊かにし、社会の発展に寄与していく方法を探究し続けなければなりません。新しいテクノロジーとのつきあい方を多角的に考え続けることこそが、良い未来を形作る力になります。

ひとの学びについて研究したジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガールの著書『状況に埋め込まれた学習』によれば、学びは個人の中だけで起こるのではなく、共通の目的や関心事にとりくむ人びとの間の相互作用において生じています。この理論は、新し

い知識やイノベーションが人びとのコラボレーションの場から生まれることを示しています。

学術コミュニティでも、コラボレーションは大切です。たとえば、人類学ではかつて、たった一人で異文化のなかに飛び込んでフィールドワークを行い、民族誌を執筆するのが主流でした。ところが最近では、「チーム・エスノグラフィ」が注目されています。属性や専門領域が異なる調査者の経験、分析視点を活かし、それぞれが収集したデータを突き合わせて議論することで、多面的な解釈や新しい洞察が得られ、よりリアルなフィールドの描写が可能になるというアプローチです。もちろん、コラボレーションは簡単ではありません。けれども、学問の境界を越え、慣れない場所で他者とともに考え、学ぶことが、自己変革とイノベーションに結びつきます。

私自身のキャリアにも、越境の経験と他者との学びが少なくありません。私は海中ロボットの研究で博士の学位を取ったのち、しばらくは本学の生産技術研究所で教員を務めていましたが、その後、理化学研究所にポスドクとして就職しました。そこで、ロボティクスからバイオロジーという全く違う分野に越境するなかで、自分のロボット分野における専門性を生物学に活かす方法がないかを考え続けました。その頃の着想が、その後のマイクロ流体デバイス研究の飛躍につながりました。この経験から、領域を超えた時に知識や技術の新たな組み合わせが生まれ、イノベーションが起きることを身をもって学ぶことができました。それは、当時理化学研究所にいた多くの研究者との対話のなかで閃いたものです。

みなさんは大学院教育を通じて、各自の専門分野において深い知識とスキルを獲得されたはず。その領域だけにとどまらず、ディシプリンの境界を柔軟に越え、新たなコミュニティでも学び続けてほしいと思います。東京大学では文理を越境する、という理念を

重んじるとともに、企業や市民社会とのコラボレーションを展開し、多様な立場の人びとが互いに学びあう場を創り出してきました。みなさんが今後さまざまな課題に向きあい、ディシプリンや組織の境界を越え、多様な人びとと対話し、ともに学びあうなかで、自身のオリジナリティを発見し、飛躍されることを期待しています。

コラボレーションの難しさは、われわれが自分以外の誰かの立場に立って、物事を考えることの難しさでもあります。とりわけ、自分が満たされた生活を送っていると、社会的弱者の立場を想像したり、その声に耳を傾けたりする機会が乏しくなりがちです。

弱者の視点について深い示唆を与えてくれるのが、大江健三郎氏です。東京大学は昨年9月に大江健三郎文庫を発足させ、1万8千枚におよぶ自筆原稿のデジタルアーカイブと4,000点近い関連資料を研究者に公開しました。障害者や戦争被害者の痛みに寄り添う大江氏の作品は、社会的に弱い立場にある人びとへの想像力を働かせ、「われわれの文化の中心指向性」を乗り越えることの重要性を説いています。たとえば、1965年に発表した『ヒロシマ・ノート』において大江氏は、広島市の被爆者の声に耳を傾け、被爆者が経験した苦痛や社会からの疎外感を深く掘り下げることで、核兵器の脅威と戦争の悲惨さ、そして平和な社会を実現することの大切さを世に訴えました。

ロシアによるウクライナ侵攻、そしてガザ地区での悲劇など、今なお世界の多くの地域で紛争が続いています。私たちには、戦争という極限状態で生きる人びとの苦しみを本当に理解するのは難しいとしても、なぜこのような悲惨な出来事が起こるのか、その原因を社会的弱者の側に立ちながら問いつづけ、どうしたらそうした不幸を世界から無くすことができるか、これを追究することは可能です。

今年1月に発生した能登半島地震では多く

の方が被災されました。今も厳しい避難生活を強いられている方々があります。平穏な日常を突然奪われた人びとに思いを馳せ、自分にできることを考え、行動に移すべきです。寄付、支援ボランティア、政治参加など、私たちにできることは多岐にわたります。大事なものは、自分の生活圏を離れた場で起こる災いをただ傍観するのではなく、弱い立場にある人びとへの想像力と共感を働かせ、社会正義と平和のために行動することです。それが創造的地球市民に求められる義務と責任だと言えるでしょう。

未来はそもそも見えないもので、目の前には存在していません。一方で未来は、みなさんの選択が築いていくものです。単純な正解はありませんが、それが本当に望ましいものかについて、私たちは考え、話しあうことができます。本日、東京大学で学位を受けられるみなさんには、創造的地球市民としての共感をもって、社会的弱者の声に耳を傾けることを忘れないでほしいと思います。多角的な視点で世界を見ることも、そして公共的なビジョンの下でテクノロジーを活用することもまた、真の知性を磨く鍵です。コンフォートゾーンから抜け出し、越境する経験に踏み出してみてください。アウトサイダーであるからこそ、自分の独創性に気づき、他者のために力を発揮できることも多いのです。対話を通じた創造的で協働的、そして共感的な学びの経験は、みなさんの長い人生の航海をとてても豊かなものにするはず。す。

東京大学は、社会に開かれた大学として新たな知識と未来を共に創っていきます。みなさんとのつながりを保ち、いつでもみなさんが訪れることのできる学びの場でありたいと思います。東京大学の一員としての誇りを胸に、いま、新しい世界へと飛び立っていきみなさんの成長と成功を心より願っています。本日は本当におめでとうござります。



答辞



公共政策学教育部
名和宏晃さん

公共政策大学院の名和宏晃と申します。本日は学位記授与式を開催いただき、修了生を代表して心よりお礼申し上げます。約10年前の高校生当時には縁がなかった東京大学で、いまこうして答辞を述べていることに不思議な思いです。

私は社会人学生として2020年春に入学し、長期履修学生制度を用いて4年間大学院で学びました。思い返せば、新型コロナウイルスに始まり今年元旦の能登半島地震など、様々な危機を目撃した4年間でした。

また、私のライフステージも大きく変化しました。仕事ではマネージャーに昇進し、管理職として周りからの期待や業務への視点が変わり、家庭では一児の父親となりました。履歴書上は箔が付いた一方で、実際には挫折や後悔の方が多く苦しい時期でした。仕事と学業の双方で、期待通りの結果が出せずに苦悩することや停滞感に憔悴する時期もありました。振り返れば、過去の実績から得た自信がいつしか過信や慢心に変わっていたと反省しています。そして、この葛藤から得た教訓は主に3点あると考えます。

1つ目は、決して私は優秀ではないこ

間、私は充実した学生生活を送ってまいりました。学業面では興味の赴くまま、生物学や情報学、歴史から教職課程まで幅広い分野を学びました。また、さまざまな課外活動にも参加致しました。1年生の時にはオーストラリアのNational Universityを訪問し、海外の学術環境を体験しました。2年生の時には、和歌山県の熊野古道を山伏のかたや濱田元総長とご一緒し、雄大な山々や滝に心を打たれました。3年生の時に宮崎県綾町での町おこしに参加し、毎晩のように地元の方々の特産の焼酎を飲みながら交流を深めましたのもいい思い出となっております。その後のポストンでは日本人研究者の研究室を訪問させていただき、研究への熱意が高まりました。これらの活動を通じて出会った方々は、私の人生においてかけがえのない存在となってい

を用いたアプリケーションが社会に浸透し始めていることは皆様のご存じの通りかと思えます。一方で、機械学習の利用に際しハルシネーションと呼ばれる現象が問題視されています。ハルシネーションは一見むしろ事実とは異なる情報を機械学習が生成する現象です。例えば、私が研究を行った医用画像処理の分野では、MRI画像など医療診断のために撮像した画像に対して機械学習を用いた画像処理を行った結果、元々写っていた腫瘍が消え健康状態に近い画像が出力されるという現象が確認されています。この現象は実際の医療現場で生じた場合に重大な誤診断を引き起こす可能性があります。対して、私は大学院で、MRI画像に対し、電磁場を用いて撮像を行うMRIの計測原理に基づいて画像処理を行う手法を開発しました。この手法は電磁気学の基礎方程式であるMaxwell方

とです。何らかの成果を挙げたとき、自分の力量でやり遂げたと思いたい自分があります。一方、周囲の支えなど様々な要因や環境に大きく左右されることを身に沁みて感じました。

2つ目は、視野の狭さを意識する必要性です。4年間学んでも、習得した知識は本棚一台程度に過ぎません。そのため、限られた知識や合理性の中で日々過ごしている現実を直視し、謙虚さを失わず学び続けることが重要です。

そして3つ目は、人生の転機は予期せず突然訪れるということです。社会変革も同様で、その瞬間までに入念な備えが必要です。私は博物館などに関する文化政策が専門であり、文化財の保存と活用の在り方を題目として修士論文を執筆しました。この分野は、日本社会の動態を踏まえれば、今後必ず対応が急務となる時期が来ると考えています。私自身、こ

のような機会をくださった東京大学と関係者の皆さまに、心から感謝いたします。

学部4年生から、私は薬学部の北川大樹教授のご指導のもと、細胞分裂に関する研究に取り組みました。顕微鏡を用いてヒト細胞を観察し、細胞分裂をつかさどる中心体の数を制御するメカニズムを明らかにしました。研究を進める中で、私は膨大な過去の論文を把握することの難しさを感じていました。生命科学分野では、これまでに3600万件以上の論文が発行されており、この情報を効率的に活用するには、コンピュータの力が必要であると考えました。そこで私は、卓越大学院の制度を利用して情報学を副専攻と致しました。副専攻では、鶴岡慶雅教授のご指導のもと、研究者の実験計画を補助する機械学習モデルを開発致

程式を撮像時の電磁場について解くことで画像処理を行う手法であり、撮像時の物理法則を考慮した画像処理を行うことでハルシネーションのような誤診断に繋がる誤差を回避します。

そして、私は、このように知見を活用してハルシネーションが引き起こす過ちを防ぐという視点は将来機械学習が広く浸透した社会のあらゆる領域で必要であり、特にこのとき、本学位を拝受した我々修了生が研究活動を通じて得た知見が重要となると考えます。なぜなら、機械学習が結果を出力する過程はブラックボックスに近く、ハルシネーションを指摘するには機械学習の使用者がその分野の専門的知見を持つ必要があるためです。今後、機械学習技術の発展に伴いハルシネーションの発生頻度は低下するかもしれませんが、そのぶん誤情報は巧妙化し、ハルシネーションを判別するた

れからの政策実現の在り方に関する確固たる答えは未だ持っていませんが、今後の日々の実務を通じて、手探りながら向き合い続けたいと思います。そして、こうした試行錯誤の中で社会貢献を目指す営みこそが、本学の卒業生に期待される役割であり責任だと考えています。

本日ここにいる私達修了生は、これから三者三様の道を歩むこととなります。不確実な未来を乗り越え、各人が進む道の途中でまたいつか再会出来ることを、私は楽しみにしています。最後になりますが、先生方をはじめ、家族や友人等、私達を支えてきたすべてに心から感謝と敬意を申し上げ、私の答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。そして、皆様ご卒業おめでとうございます。

しました。研究に関してお世話になりましたすべての方々へ、心より感謝申し上げます。

近年のAIの進歩には目を見張るものがあります。実際にこの答辞もAIの力を借りながら作成致しました。AIは、世界中の膨大な量の文章や画像を学習しており、知識の広さでは私たち人間を上回っています。一方、私たちは大学院での学びを通して、特定の分野に対する深い専門性や洞察力を身につけました。専門性を持った私たちが、幅広い知識を持つAIを利用して、新たな時代を切り拓いていけると確信しております。

最後になりますが、この9年間の学生生活を支えてくださった先生方、職員の皆様、共に学んだ友人たち、そして家族に、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

めにはより専門的な知見が要求されると予想します。したがって、社会の中で機械学習技術が適切に利用されているかを注視することは研究活動を経験した我々の重要な役割の一つではないかと思えます。

最後になりましたが、研究活動そのものから研究者としての在り方に至るまで多岐にわたりご指導ご鞭撻をいただきました諸先生方、学生生活をサポートくださった職員の皆様、研究生活を豊かにしてくれた友人たち、そして本日まで修了生を支えてくれた家族に、修了生一同改めて感謝申し上げます。皆様のご健康と東京大学の益々の発展を祈念しまして私の答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

答辞



薬学系研究科
伊藤 慶さん

本日はこのように盛大な式典を催していただき、誠にありがとうございます。修了生を代表して、心より感謝申し上げます。

東京大学理科二類に入学してから9年

答辞



情報理工学系研究科
江田尚弘さん

本日は先生方ならびにご来賓の皆様方のご臨席のもと、学位記授与式を催していただき、修了生を代表して心より御礼申し上げます。

昨今、機械学習技術の発展は目覚ましく、ChatGPTをはじめとする生成AI

令和5年度卒業式



令和5年度卒業式が、3月22日（金）に、安田講堂において挙行されました。今年度の卒業式は、第一部・第二部・第三部の3回に分けて挙行され、音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「ディベルティメント 二長調 K.136」の演奏の流れる中、総長をはじめ、理事・副学長、各学部長並びに来賓の宗岡正二東京大学校友会会長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。藤井輝夫総長から各学部の卒業生代表

に学位記が授与され、卒業生に向けて告辞が述べられた後、来賓の宗岡校友会会長から祝辞をいただきました。その後、卒業生総代（第一部：文学部 徳山芳さん、第二部：法学部 一瀬ルアナさん、第三部：工学部 西村有紗さん）から答辞が述べられ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、卒業生とご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

総長告辞

みなさん、卒業おめでとうございます。思い起こしますと、みなさんの多くが入学された令和2年度から、全世界を覆った新型コロナウイルス感染症のため、授業はオンラインが中心となり、学生生活もさまざまに制限されました。みなさんは多くの戸惑いと不安を感じたことでしょう。東京大学としても、経験したことのない厳しい事態でした。この困難を仲間と共に乗り越えたみなさんが、晴れて卒業の日をむかえ、新たな一歩を踏み出すことを本当にうれしく思います。

今日はみなさんに、これからの世界そして社会を創っていくにあたってお伝えしたいことを、私が本学で学んでいたころに興味を持っていた「海」を巡る事例なども交えながらお話しします。海のことに限らず、広い意味でのみなさんの今後のアクションにつなげていただければと考えています。

さて、これからみなさんは実社会に出て、あるいは進学して、新しい人びとと関わりあうことになります。東京大学という、ある意味では「特殊な」環境で安心して学んでいた

生活とは異なり、さまざまな課題が目の前に渦巻く、海への船出です。ときには、自分と考えの異なる人びとと鋭く対立することもあるでしょう。現実社会には多様な価値観があるからです。

「良い海」と聞いて、みなさんはどんな海を思い浮かべるでしょうか？みなさんがスキューバダイビングのファンなら、透き通った真っ青な海とカラフルなサンゴ礁を思い浮かべるかもしれません。しかし水が透明なのは、栄養が少ないからで、海の生物にとって望ましいとは限りません。東京湾の漁業者は「ちよっとぐらい海が濁っていた方が魚も貝もおいしい」と言います。かつて「瀕死の海」と呼ばれるほど濁っていた瀬戸内海は、今では栄養塩が減り「きれい」になりすぎて、水産業にマイナスの影響が出てきました。また、もし環境保護団体のメンバーなら、ウミガメやジュゴンなどの希少な種が生息する海こそが望ましく、大切にすべきだと考えるでしょう。他方で、カーボンニュートラル社会を目指して洋上風力発電施設を建てようとするなら、少しぐらいの台風や災害ではびくともしない頑丈さ、これを許容する海を「望ましい」

と感じるかもしれません。このように、海にはその恵みをめぐって、多様な望ましさがありうるのです。それゆえ、ある側面で「望ましい」利用や保護が、他の立場からすれば「反対すべき」開発や制限であったりします。場合によっては、海洋プラスチック問題のように、誰ひとりそうした結果を望まないまま、地球規模の汚染が進んでしまう、ということさえあるのです。

本日卒業されるみなさんには、深刻な対立や複合的な矛盾が、この社会の現実として存在する、ということから目をそらさないでいただきたいと思います。そして、その解の模索においても、多様性の尊重が大切になります。力で押しさへこむ画一的な解決は、社会的な弱者や声を上げられない人びとに、不条理な犠牲を強いるかもしれません。たとえ相手と自分の主張が鋭く対立し、相互理解や信頼の醸成が不可能に思われたとしても、あきらめずに関わりあい、対話の場をつくり続ける意志と態度を捨てないでください。世界の分断が進む現在だからこそ、以前にも増してそうした多様性に関わった対話によって可能性を模索する志が重要になっています。

一方、気候変動や生物多様性の喪失、パンデミックや、エネルギー資源をめぐる問題、食料の不足、情報技術や人工知能の急速な発達、さらにウクライナやガザ地区をはじめとする地政学的な不安定さの増大など、現在われわれは実に多くの世界規模の課題に直面しています。みなさんには、東京大学の卒業生として、それぞれの立場でこれらの解決やその手がかりを見出すことに貢献してほしいと願っています。

先ほど、望ましい海の一例として漁業の話にふれました。日本をふくむアジアは世界の漁業生産の7割を占めており、世界の漁業の中心です。一方で、この海域にはいまだ多くの違法漁業が存在し、乱獲状態にある水産資源も少なくありません。また、世界で人口1,000万人を超えるメガシティのうち半数以上がアジアにあり、先ほどふれた海洋プラスチックなどの汚染が最も深刻なものこの海域です。日本をふくむアジアの国々が連携し、こうした水産資源問題や海洋汚染問題を解決していくことは、世界の海の持続可能性への直接的な貢献でもあります。

解決には法の整備も重要です。世界の海の利用に関する権利・義務関係を定めているのが、“海の憲法”でもある国連海洋法条約です。また、国をまたいで移動したり取引されたりする種の保護や多様な生態系の保全を行うのは、ワシントン条約や国連生物多様性条約です。これら国際法の解釈は、国によってさまざまですが、かねてから欧米中心主義的な傾向があると指摘されてきました。

洋上風力発電にしても、欧米諸国では発電機の基礎部分を海底に打ちこむ“着床式”の技術が普及していますが、日本では海の上に浮いた状態で発電する“浮体式”の技術開発を進めています。着床式は、浅い海にしか設置できません。しかし浮体式は、水深の深い海域にも対応できます。台風や津波が来ても、上下左右の揺れに対応する「遊び」があるため、崩壊や漂流も避けられます。海洋災害に

強い洋上風力発電の普及が、世界のカーボンニュートラル化を推し進めるかもしれません。また日本は2018年に国際捕鯨委員会IWCを脱退しましたが、海を食料生産の場としてみるのか、あるいは自然を守るためのサンクチュアリ（聖域）とみるかは、文化にもとづく大きな立場の差があります。捕鯨問題も利用対聖域の二項対立で片付けるのではなく、生命・環境を守る規制や保護区を設定しながら生業・産業の持続を可能にするあり方にまで議論を進めないと、妥協点を見出すことができません。

もちろん世界の諸地域はさまざまな事情を抱え、アジアのなかにも多様な国と地域があります。G7で唯一の非欧米国である日本が欧米以外の地域の視点を忘れず、国際的対話をリードする役割をになうことは極めて重要です。みなさんはこれから世界で活躍されるでしょうから、それぞれの立場で、それぞれの場所から、グローバルな視点で見たときの自分の個性や強みを活かして、世界の公共性に創造的に貢献していただきたいと思います。

さて、本日最後のメッセージは、これからの東京大学とみなさんとの関係についてです。

近年、科学技術開発においては、RRI：Responsible Research and Innovation、「責任ある研究とイノベーション」という概念が重視されています。これは、望ましい社会像や価値を明確に意識し、研究の初期段階からさまざまな立場のステークホルダーに参画してもらい、社会のニーズや問題意識、価値観を包摂することによって、社会的に好ましい方向へ責任をもって科学技術を発展させるという考え方です。

海についても、近年さまざまな新技術や大規模実験が提案されています。気候変動緩和のために、大量の鉄を海に散布して植物プランクトンの成長を促進させCO₂吸収率を上げる技術、火力発電所などで発生するCO₂を回収して深海や海底に注入する技術、海水

で大量の雲を発生させ地上に到達する太陽光を調節する技術などの案が出されています。激甚災害を引き起こすことが懸念されている台風については、航空機から水やドライアイスや台風暖気核へ散布してエネルギーを弱める制御技術なども検討されています。

これらの計画はいずれも新しい可能性ですが、同時に大きな不確実性も有しています。たとえば台風制御技術の場合、気象現象そのものは最先端の観測と流体力学のシミュレーション技術を用いて一定の予測が可能でしょう。しかし、その制御行為が周辺の農作物や水産物、あるいは生態系にどのような影響をもたらすかは、現段階ではまったく予想されていません。

たとえ技術的に可能で、研究として興味深くても、つねに想定外の結果が起こりうるリスクや影響を広く社会に示し、責任と誠意をもって対話を続け、多様なステークホルダーの理解と信頼を醸成していく、そのプロセスが重要です。東京大学が、新技術の開発とイノベーションに責任をもつ教育研究を力づくで推し進めるためには、これから社会に出て活躍するみなさんの声が不可欠です。ぜひこれからも東京大学とのつながりを絶やさず、さまざまな課題に取り組むみなさんの声を聴かせてください。

みなさんがこれまで、コロナ禍の苦境に負けず、積み重ねてこられた研鑽と多大な努力にあらためて敬意を表するとともに、それを誇りに思います。今日からみなさんは東京大学のアラムナイ（同窓生）となります。本学で培った力とそして学問、友や師たちとの関係を礎にして、新しいことに挑み、地球と人類社会の未来に貢献していただくことを期待しています。

みなさんの未来が幸せなものでありますように。

卒業、おめでとございます。



答辞



文学部
徳山 芳さん

本日は、教職員の皆さま、ご来賓の方々をはじめ、多くの皆さまのご臨席の下、このように盛大な式典を催していた

いただきましたこと、卒業生を代表いたしまして心より御礼申し上げます。また、藤井総長、宗岡校友会会長よりお言葉を賜りましたことに対しても、重ねて御礼申し上げます。

私は僧侶である夫との結婚を機に仏教学やインド哲学に関心を持ち、学士入学で文学部インド哲学仏教学専修課程に進学しました。惜しみなく知識を授けてくださる先生方下、サンスクリット語やパーリ語、チベット語、漢文など多言語のテキストを通して、言語では知り尽くすことのできない世界の本質的な部分に近づこうと暗中模索してきました。例えば、辞書を片手に宇宙探検をしているような日々でした。

大学4年次では妊娠・出産を経験し、

学業と育児の両立に苦しむ中、先生方や職員の方々、先輩方、友人たち、学内の保育施設の職員の方々、家族、実に多くの方に支えていただき、「もっと知りたい」という気持ちを絶やさず学業を続けることができました。4月からはさらに、大学院で研究に取り組んでいく予定です。

さて、仏教では「縁起」という言葉で人間や世界が表現されます。端的に言えば、私たちは自分一人ではありえず、常に多くのものと因果関係を結ぶことで初めて成り立っているということです。この多くのものには、自分の細胞の一部から身近な他者、そして全く親しみを感じない世界の出来事まであらゆるものが含まれます。万物と自分とが繋がらうこのダイナミックな世界像は、古代のイン

ドで生まれ、今も色あせていません。いま卒業する私たち一人一人の行動や決断は、どんな些細なものでも、社会や他の人の未来につながっています。そこでは、自らの選択に対し責任が生じると同時に、私たちが互いに助け合うことで、ともによりよい明日を目指してゆく可能性に満ちています。新たな責任と可能性を胸に、これからの日々を精進してゆきたいと思えます。

最後になりましたが、今日までご指導いただいた諸先生方、職員の皆さま、共に学び、励ましてくれた友人たち、そして私たちが温かく見守り支えてくださった家族に、心より感謝申し上げます。東京大学のますますの発展を祈念して、答辞とさせていただきます。

答辞



法学部
一瀬ルアナさん

本日は私たち卒業生のために盛大な式典を催して頂き、誠にありがとうございます。ご多忙のなか、教職員の皆様・御来賓の方々のご臨席を賜り、卒業生一同心より御礼申し上げます。

振り返ると、多くの出会いや機会に恵

まれた大学生活でした。私は推薦入試で東京大学に入学し、法学部に進学しました。2年次からは尊敬する教授のもとでUTokyo GUCプログラムの東アジア近代法制史の授業のティーチングアシスタントをさせていただきました。また一学生として参加した東京大学グローバルリーダー育成プログラムでは各分野の第一人者の方々から学び、イギリスのオックスフォード大学への短期留学の機会をいただきました。全て宝物のような思い出です。手を差し伸べてくださった全ての方に深く感謝いたします。

東京大学で法を学ぶということは、私にとって様々なことを意味してきました。法学は、限りなく複雑な人間社会そのものに向き合う学問です。法を学ぶ者としてできることは、世界に存在する様々な支配の形態を冷静に見抜き、抑圧される者に寄り添うこと。そのため

に膠着した現状を打ち破り、新たな秩序を築き上げる勇気と力を持つこと。東京大学で法を学んだ経験は、何よりも、このどこまでも強く、前向きな精神性を身につける過程だったのではないかと感じております。

また、特に印象的だったのは、自らの学問の正当性・重要性を絶え間なく批判し続ける、先生方の知的姿勢です。法の存在を所与のものとするのではなく、現行法では対処できない問題や、法の制定の歴史の経緯を学ぶことで、法の限界や失敗、枠組みが孕む特権性に自覚的であることを求められました。日本の法学部では欧米主導で形成されてきた法の限界を感じざるを得ないからこそ、この視点は強く意識されたものなのかもしれません。

今、世界を見渡すと、不正な暴力により人々が支配されている状況が多く見ら

れます。その中で、法には何ができるのか、そして学問には何ができるのか。既存の法の限界を痛感する一方で、人間が真摯に取り組めば、より公正な社会に必ずや向かい得るということを信じさせてくれたのも、東大法学部でした。

私たちは本日、東京大学を卒業します。学問や学歴を自己の利得の手段と思わず、ここで得た全てを地球社会に還元すべく、善意と高い志をもってより良い世界を創造することが我々に託された使命のように思われます。

最後になりますが、私たちが導き支えてくださった先生方、職員の方々、家族や友人に深く御礼を申し上げ、東京大学および大学で学ぶ皆様の良き未来を願い、答辞とさせていただきます。

答辞



工学部
西村有紗さん

本日は、私たちのために素晴らしい式典を催していただき、多くの皆様のご臨席を賜りましたことを卒業生一同、心より感謝いたします。また、ただいま藤井総長と宗岡校友会会長から激励のお言葉

をいただきましたことを重ねて感謝いたします。

さて、私たちの大学生活はパンデミックという異常事態から始まりました。楽しみにしていた学内外の多くの活動が制限され、私たちにとっては孤独と不安に対峙する苦しい期間でした。しかしその中でも、私たちの学業が中断されることはありませんでした。いかなる状況でも量と質を変えずに、学びの機会を提供くださった先生方、大学関係者の皆様の尽力に心からお礼申し上げます。

後期課程においては多くの学科で対面授業や国際交流が再開されました。私は工学部マテリアル工学科に進学し、マサチューセッツ工科大学に一学期間交換留学をする機会をいただきました。そこでは研究者同士が活発に議論し交流する一方で、競争とスピードが重視される独

特の緊張感がみなぎっていました。寝る間を惜しみに研究に励む様子に感銘を受け、自分も負けてはならないと決意を固めたものです。

工学部マテリアル工学科での卒業論文においては、ヘルスケアを目的としたバイオセンサーについて研究しました。先行研究を読み解きながら、実験ならびに解析手法を自ら考案する日々は、心躍るものでした。既存のモデルでは説明できない事象を解明していく、まさに世界を拓けていく経験は他では得難いものだったでしょう。

私は来年度大学院に進学致しますが、工学に携わる身として、その社会に与える責任はますます重みを増します。さらなる高性能デバイスの必要性、気候変動への対策、ヘルスケアの拡充など、様々な社会的要請に対して材料分野が貢献す

るところは大変大きいと考えます。こうした世界規模の課題に対してブレイクスルーを実現するためには、材料機能の限界を突破することが肝要です。留学で味わった緊張感を胸に、研究室の垣根を越え、大学の垣根を越え、国家の垣根を越え、常に走り続ける存在でありたいとここに宣言いたします。

最後になりますが、温かく、時に厳しく指導してくださった先生方、職員の皆様、研究室の皆様、4年間を共に歩んだ友人たち、そして常に私の挑戦を応援し鼓舞してくれた家族に心から感謝申し上げます。皆様方のご健康と東京大学のますますの発展を祈念して答辞とさせていただきます。

令和6年度 学部入学式・大学院入学式



令和6年度の学部入学式と大学院入学式が、4月12日に日本武道館において挙行されました。

午前の学部入学式には、約2,930名の新入生、そのご家族など約5,310名、合わせて約8,240名が出席しました。総長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓が登壇しました。式では、大学を代表して藤井輝夫総長から式辞が述べられ、続いて真船文隆 教養学部長が式辞を述べました。式辞の後、来賓のJAXA宇宙飛行士候補者 米田あゆ様、東京大学校友会 宗岡正二会長からそれぞれ祝辞をいただきました。その後、入学生総代 山際美愛さん（教養学部文科三類）による宣誓が行われました。

午後の大学院入学式には、約3,030名の新入生、そのご家族など約3,350名、合わせて約6,380名が出席しました。総長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓が登壇しました。式では、大学を代表して藤井総長から式辞が述べられ、続いて浦野泰照 薬学系研究科長が式辞を述べました。式辞の後、来賓のニューヨーク・カーネギー財団理事長 Louise Richardson様、宗岡校友会会長からそれぞれ祝辞をいただきました。その後、入学生総代 丹後咲杜さん（経済学研究科）による宣誓が行われました。

両式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、新入生のご家族を含む多くの方にご覧いただきました。

令和6年度学部入学式総長式辞

新入生のみなさん。ご入学おめでとうございます。みなさんの新たなスタートを、ここで共に祝えることをたいへん嬉しく思います。

これから始まる大学生活でみなさんが獲得するものは、これまでの学校での学習とは性質の異なるものになるでしょう。大学は、確立した知識をただ学ぶところではありません。なぜなら学問は、未知なるものに挑む試みだからです。過去に遡って世界と人類の歴史を明らかにする、現在の社会・文化を分析する、過去から未来にもつながっていく生命の仕組み、宇宙や物質の真理を探究するなど、東京大学はさまざまな未知に取り組んでいます。

人類はその長い歴史の中で、ものごとの観

察を通して、知見を蓄積し共有する、学問の手法を進歩させてきました。たとえば、ニュートリノの存在は、1930年にはじめて理論として提唱され、1956年に原子炉から、1970年には太陽からのニュートリノが観測されます。1987年に、東京大学が中心となったカミオカンデグループが、16万光年先の超新星爆発によるニュートリノの観測に成功し、1998年には、それが質量を持つことを示す「ニュートリノ振動」が発見されました。そしていま、高感度化したスーパーカミオカンデのもとで、「ニュートリノ天文学」、さらには重力波や他の観測ともあわせて探求を進める「マルチメッセンジャー天文学」という学問分野が発展しています。極小の素粒子ニュートリノにより、無限大の宇宙の謎を解



総長

藤井輝夫

き明かすというアプローチは、スケールの大小の差異をこえて物理の世界がつながっていることを感じさせます。

ノーベル物理学賞で広く知られるように

なったアト秒は、100京分の1秒の単位ですが、アト秒パルスを用いると、物質の中の電子の瞬間的な移動をとらえることができます。化学反応への理解が深まり、「アト秒科学」という新たな分野の開拓が期待されています。このように、コンピュータの計算速度、測定の時間解像度、人工知能による技術革新などさまざまな次元で、より細かく、より速く、より精緻な測定を実現し、解像度を上げていくことは、学問の重要な試みのひとつです。

しかしながら学問に必要な解像度は、時間・空間の物理的な尺度や次元にとどまるものではありません。

社会や文化の測り方も大切です。ある地域を、たとえばエスニシティの観点から分析すると、さまざまな差異と構造が見えてきます。ただ、その結果だけで、そこで暮らす人びとを理解できるでしょうか。「セクシュアリティ」「世代」「教育」「ジェンダー」「社会経済状況」など、他の要素で分析すれば、また別な差異が浮かびあがるでしょう。ひとは複数のアイデンティティを持っていて、社会は多種多様な人びとから構成されていますので、ひとつの側面から見ると、別の側面が見えにくくなってしまふことがあります。あるマイノリティ性における差別をそだけ切り取っても、それを十分に理解したとはいえません。なぜなら、そのひとは持つ他の属性によって、受ける差別の深刻さが変わるからです。差別されるという経験が、複数の属性のあいだで交錯するため、そのリアリティをそれぞれの次元の足し算だけでとらえることはできません。

このように、人間の多次元性とそれらの関係性に着目して、その力の社会的な作用を分析する枠組みを、インターセクショナルリティ（交差性）といいます。インターセクシ

リティは、いくつもの要因が多次元でからみあう複雑な関係性をとらえる、重要な概念のひとつです。そして、解像度が問われる次元そのものが社会によって構築され、また自覚しにくいものであることにも注意が必要です。

医学や神経科学の分野では、人びとの脳の機能や行動の差異を一義的ではなく、多様性の形として尊重することも重要だとされています。ニューロダイバーシティとよばれるこの考え方に基づくと、発達や学習において、疾患や障害とされているような脳の機能も、ひとは持つ多次元の特性のひとつとしてとらえなおすことができます。また同じ疾患でも、困難を感じる機能とその程度が、個人ごとに異なることを前提にはじめて、個々のニーズと状況に応じた対策が可能になります。

物事を多角的にとらえる姿勢は、学問分野をこえて他の分野とコラボレーションする場合にも重要です。

たとえば、工学分野である半導体の微細加工技術を用いたマイクロ流体デバイスの開発と、医学の分野における、さまざまな臓器由来の細胞培養の研究は、一般には異なる学問分野と考えられています。しかしながら、私自身の研究では、これらの分野の境界をこえ、マイクロ流体デバイス上で臓器由来の細胞を培養し、薬の効果をテストすることが可能となりました。壇上に座っておられる南學正臣医学部長と共同研究をしたこともあります。この分野は Organ-on-a-Chip とよばれますが、一見異なる学問分野の知が交差する場所で、これまでにない発見やブレイクスルーが起こることを示しています。

世界が多次元であることの重視は、ある課題に対する答えが必ずしもひとつでない、ということを広く理解することにもつながります。パンデミックへの対策、社会問題、国家

間の関係、気候変動への対応など地球規模の課題解決において、正解はひとつであるという考え方の強制が分断を招いてしまうことがあります。自分が強い意見を持っている場合でも、そうでない視点もふくめて考えてみるのが大切です。解決すべき問題自体も多次元であることを認識しつつ、さまざまな属性を持つ人びとの存在に思いをさせ、対話を通して合意形成を目指す態度が必要です。

自分がこれまで信じ、いまでも正しく感じていることを、客観的に評価しなおすことは簡単ではありません。

ひとは、これまでの経験や固定観念に影響され、合理的でない情報の処理や判断をおこなう性質、いわゆる「認知バイアス」があるからです。情報過多の現代社会では、認知バイアスがフェイクニュースの拡散やマスメディア情報の解釈などに大きく作用します。ある社会問題について特定の意見を持つひとは、その意見を支持する情報を探しあつめ、それに反する情報を無視する傾向があることが指摘されています。またひとは記憶に新しく、印象に残った情報に基づいて判断を下す傾向があるため、ニュースやSNSでの拡散に大きな影響を受けます。自分自身の知識や能力を過大評価するバイアスもあります。

認知バイアスの存在は、多次元性に目を向けることを難しくします。学問においても生活においても、私たち自らが持つ認知バイアスを可能なかぎり自覚し、調整する姿勢が重要です。

ここで、みなさんを迎え入れる東京大学という「社会」に、目を向けてみましょう。

東京大学では、大学の進むべき方向を示した U Tokyo Compass のもと、世界の誰もが来たくなるキャンパスを創るという理念を掲げています。2022年6月には、「東京大学



ダイバーシティ&インクルージョン宣言」を公表、また今年2月には「東京大学における性的指向と性自認の多様性に関する学生のための行動ガイドライン」を策定するなどして、すべての構成員が差別されないことがない公正な環境を実現すべく動き出しています。この4月には多様性包摂共創センターを開設し、教育、研究そして実践を通して、そのための取り組みを具体的に推進する体制をととのえたところです。

その一方で、東京大学の入学者の性別には、大きな偏りがあります。そして、その偏りは文科よりも理科でさらに大きくなっています。その基礎には、そもそも受験する女性が少ないという状況もあります。東京大学が、女性のみなさんをはじめ多様な学生が魅力を感じる大学であるか、多様な学生を迎え入れる環境となっているかについても、問わなければなりません。

昨年の内閣府男女共同参画局の発表によると、日本の女性国会議員の割合は16.0%で、世界139位です。上場企業の役員における女性比率は10.6%で、政治も経済も、いまだに意思決定にかかわる女性の数が圧倒的に不足しています。教育においても、女性の進学や理系受験をさまたげるような障壁の存在が指摘されています。

このように、特定の属性を持つひとが、等しい機会を得られずに排除され、あるいは人一倍の努力をせざるをえない状況を「構造的差別」といいます。この構造的差別から脱却すべく、経団連は、2030年までに役員に占める女性比率を30%以上にする目標を掲げました。東京大学も、2020年に30% Club Japanのメンバーとなり、UTokyo Compassにおいても、学生における女性比率を30%とすることや、新たに採用する研究者の女性の割合を30%以上とし、教員における女性

比率を向上させるという目標を明記していません。

なぜ30%という数値目標なのかということですが、ハーバードビジネススクールのロザベス・モス・カンター教授は、ビジネスの場に関する研究において、女性が15%に満たない組織では、女性一人ひとりの能力や技能が、女性という集団的な属性に関係づけられる傾向があること、そして女性の比率が30%を超えるとそうした傾向が変わりうることを指摘しました。すなわち、女性個人としての能力や技能に応じた貢献が可能になり、意思決定プロセスに影響をあたえ、組織のさまざまな変革を推進できるようになるということです。

であればこそ、その状況ゆえに活躍できない少数派の女性の割合を30%にまで上げることが、公正な社会実現に向けた最初の目標となるでしょう。

社会的・文化的性別の次元ではマジョリティの集合に属しているひと、障害の有無、貧しさ、エスニシティ、性的指向・性自認などの別な次元ではマイノリティであるかもしれません。しかし、複雑化した現代社会には、単次元の指標では測定できない、複合的な構造的差別が存在しており、複数のマイノリティ性を持つひとが、交差する次元の中で、さらに弱い立場に追いやられてしまうような事態も見すごすことはできません。

私たちには、これまで触れてきたような構造的差別の再生産と拡大とを断ち切り、あらゆる構成員が等しく権利を持つ社会を実現する責任があります。多様な人びとが活躍することで、社会はより豊かなものになるからです。その社会に生きる者たち自身が、責任をもって構造的差別を解消していくという考え方はきわめて重要です。現実を観察する解像

度を上げ、考え、行動していくことが強く求められます。

「障害の社会モデル」という言葉があります。障害は、身心の機能不全という個人的な特性に由来するものではなく、むしろ機能不全をうけいれようとしない社会によってつくられるものであり、社会にはその障壁をとりのぞく責務がある、という考え方です。ここでは、社会的排除が問われ、制度的な障壁の除去や、偏見の克服が試みられます。東京大学はこの考え方を重視し、合理的配慮のもとさまざまな構成員が活動できるよう環境を整備する方策を進めています。さまざまな構造的差別は自然には解消されないもので、私たちがそれを認識し、自省し、アクションをとる必要があります。

最初に述べたように、学問は未知への挑戦から始まります。ここに集まった新入生のみなさんが、「構造的差別」のいまだここに位置しているのかを知ることは、それぞれにとって最初の宿題かもしれません。構造を知る者は、同時に、その構造を変える力を持ちます。ぜひ、現在の社会構造をみんなで望ましい方向に変えていくにあたって、自らが持ちうる力を探っていただきたいと思います。

みなさんが前期課程で通う駒場キャンパスでは、インターセクショナルリティ、ジェンダー、法律、障害、政治などに関する、さまざまな科目を開講しています。女性や性的マイノリティをふくむ多様な学生が、安心感と帰属感を持って学べる場である「駒場キャンパス SaferSpace」というコミュニティもあります。基礎科目や総合科目に加え、語学の授業などを通して、異なるさまざまな文化に触れる機会が豊富にあるはずですよ。

一見、関連性が低いと思えた科目が、具体的な問題解決のなかでつながっていることに気づくことがあるかもしれません。答えがな



いかかもしれないし、あったとしてもひとつではないかもしれません。点と点をつないでみることは、先に述べた Organ-on-a-Chip の例のように、新たなブレイクスルーのきっかけにもなります。

多様な属性を持つ人びとが暮らすこの社会

で、仲間の輪を広げていくことも大切です。大学生活で会うさまざまな人は、みなさんの未来を豊かにする財産でもあります。挑戦を恐れず、自らの力と可能性を信じて進んでください。

みなさんには、この東京大学において、多くのひとと出会い、多様な知に触れることで、

解決すべき問題の多多元性に思いを馳せ、よりよい社会の実現に向け、それぞれの力を発揮していただきたいと思っています。のびのびと大学生活を楽しんでください。入学、おめでとうございます！



教養学部長

真船文隆



JAXA宇宙飛行士候補者

米田あゆ 様



東京大学校友会会長

宗岡正二 様

入学生総代宣誓



教養学部

山際美愛 さん

穏やかな春の光に祝福された今日という素晴らしい日に、令和6年度東京大学入学式に出席出来ることを、入学生一同、大変嬉しく思います。本日はこのような盛大な式典を、私たちのために挙げていただき、誠にありがとうございます。

生まれてから今日まで、私たちは、家族や友人、学校の先生など、出会ったあらゆる人に守られ、助けられながら少しずつ成長してきました。改めて感謝の意を示したいと思います。

皆さんの温かい応援に胸がいっぱいになる一方、ニュースを見ると、悲惨な出来事や胸が締め付けられる事件、そして終わらない紛争と、国内外には解決困難な社会問題が山積しています。周りに目を向けると、日本の女性管理職比率は、188カ国中175位と最低レベル。「女性だから」「男性だから」という二元論も、毎日のように耳にします。生まれ持った性別に関わらず個人個人が社会で輝くには、私たち一人ひとりが、自覚なく持っている偏見をなくそうと努力する必要があるのではないのでしょうか。勿論これは、ジェンダー問題に限った話ではなく、先に述べた社会課題にも通ずる話です。

しかし、このような偏見は、無自覚だからこ

そ、容易に気づけません。私自身、振り返ってみると、何か決断するときに、自分の性別を言い訳にしているときがあります。

異なる意見を持つ人や、今まで触れたことのないモノと出会うと、おのずと視野が広がります。幸いにも、私たちの周りには、志や目指す先は違えども、右を見て左を見ても、学びへの貪欲さを共有する先輩や同級生に溢れています。多様な背景を持つ最高の仲間たちと交流する中で、それまで自覚なく持っていた偏見に、気がつくこともあるでしょう。

物事は、思い通りには進まない。私たちはこの先幾度となく、挫折や困難にぶつかるでしょう。しかし、私たちは、逆風の中でも諦めずに挑戦を続けることの、難しさと面白さを知っています。私たち入学生一同は、学問探求の蓄積と最先端の研究が併存する知の拠点、東京大学の一員であることの喜びと自覚を胸に、周りとの交流を通じて各々の価値基準をアップデートしながら、今よりもっと生きやすくて、今よりもっと面白い世界を築いていくためにこの大学で学ぶことを誓い、新入生代表の挨拶とさせていただきます。

令和6年度大学院入学式総長式辞

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。本日ここに集まったみなさんは、大学院生活のスタート地点に立っています。東京大学の大学院では、専門の知識を学ぶことも大事ですが、それ以上に大切なのは「学び方」を身につけることです。AIの普及など情報技術の大きな革新が始まりつつある社会において、私たちはどう学び、どのように考え、いかに行動していくべきか。それが問われています。

東京大学では、学部・大学院での教育にくわえ、ニューロインテリジェンス国際研究機構、次世代知能科学研究センター、エドテック連携研究機構、そしてBeyond AI研究推進機構など、さまざまな研究組織において、AIに関する研究や応用展開に取り組んでいます。

AIは便利なツールです。しかし使いようによって、その意味や価値が大きく変わります。アメリカのバイデン大統領はAIの安全性に関する大統領令に署名するにあたり、「人類の可能性の境界を拡大する一方で、人類の理解の限界を試している」と述べ、世の中も期待と不安をもって、その有効性を眺めています。

たとえば「将来どんな仕事がAIに取って代わられてしまうか」をめぐる議論は、私たちの未来に深くかかわっています。

2013年に発表された『雇用の未来』というオックスフォード大学の経済学者であるCarl Benedikt Freyと機械学習研究者であるMichael Osborneの共著による論文があります。彼らは702種類の仕事を調査し、米国における雇用者の47%が仕事を失う可能性が高い、と結論づけました。それらの仕事は、おそらく10年から20年のあいだに自動化が可能だからである、としています。この論

文では「カウンセラー」は代替されにくい仕事とされていたものの、カウンセリング用のAIは現在すでに存在しています。世界中で1万以上のソフトウェアが開発され、その一部は精神疾患の治療にも用いられています。これまで私たちは、カウンセリングなどの心の仕事や、芸術や科学のように創造的な活動を「ヒトらしい」特質を反映するものであり、代替不可能な聖域だと信じてきました。しかしAIと向きあう現在、こうした人間性をめぐる古典的な理解を再検討する必要がでてきたといえます。

「AIがヒトと同じ価値をもつようになった」と言いたいわけではありません。むしろ、私たちはヒトの価値や特徴を表面的にとらえていないか、という問いかけです。どちらが優れているかという問題でもありません。ヒトとAIの、それぞれが得意とすることが、少なくとも現時点では大きく異なっていることを正しく認識することが、まず重要です。

いま世の中では生成AIの問題点として、著作権の侵害や、作動の安全性、誤情報の拡散、偏見や差別の助長など、深刻な問題が指摘されています。利便性についても、プライバシーに関しても、またAIの可能性の評価にも、さまざまな立場の違いがあるでしょう。そうしたなかで、大事なのはみなさん自身の「センス」を磨くことです。AI任せにせず、最適な判断のできる分別と感性とを育てることです。

書くことを例に考えてみましょう。生成AIは、これまでの知見をうまく要約したさまざまな文章を紡ぎ出します。しかし、AIが導き出す結果はサンプルであり、「正解」の提示でも、神の「お告げ」でもありません。AIが予想以上の仕事をしたとしても、その

優秀さはあくまでもヒトの視点から与えられたものです。どのような回答を出すAIが望ましいかを、ヒトが考え、ヒトが判断し、デザインしているからです。ですから、AIの利用者たるヒトは、AIを正しく使いこなす知識とセンスを磨かなければなりません。より良い文章を作成するためには、さまざまな表現や作品に幅広く触れることで、自分へのインプットを豊かにすることが必要です。わかりやすい名文の簡潔さに触れ、その格調や趣向に感動した経験なしに、また、うまく言葉にできない自分の思いと格闘した経験なしに、優れた文章を書くセンスを身につけることはできないでしょう。

AIが出てきたからこそ、私たちは今以上に、知性について深く考え、創造する力を身につけなくてはなりません。

AIに欠けている点として、「身体性」が指摘されます。身体性とは、環境と相互作用する肉体をもつことで主体にもたらされる多様な特質のことで、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚による感受、汗を出したり体温が変化したりといった刺激に対する反応、手足の運動など、さまざまな構成要素とメカニズムをふくみます。

身体は、脳と外部環境を結ぶインターフェースです。ヒトは全身の各部位で多様な情報を感受し、脳に届けます。そして脳はその入力に応じて筋肉を動かしたり、臓器を制御したりして、身体に働きかけます。具体的には、全身にある約1000万本にもおよぶ感覚神経で情報をうけとり、640個もの筋肉を制御することで、体を動かすのです。現在のロボット技術ではまだ、このような複雑な身体性を再現できていません。

AIの実態は「計算」ですから、計算情報



が運動や動作に変換されるアクチュエータに組み込まれない限り、周囲の世界には働きかけられません。それゆえ物理的な作用をとまなうタスクの遂行能力には限界があります。たとえば、ヘルスケアにおいて、AIは歴大な医療データを分析するのは得意ですが、ヒトの医師や看護師と同じように患者の手を握り、身体をさすって癒やすことはできません。

逆に、身体性が稀薄だからこそその強みも、AIやロボットにはあります。たとえば海中ロボットは暗く冷たい海の中で、何十時間も作業をつづけ、息切れもせず、単調な作業にも飽きることがありません。

つまり、ヒトは感性豊かな身体性をもつ一方、つねに肉体そのものの「限界」がつきまとうのです。こうした制約のある身体とともに、私たちは「現実」の世界で生活しています。重力があり空気抵抗や熱伝導などの物理的な作用があるという点で、現実世界は仮想世界と決定的に異なります。仮想現実内でシミュレーションしたロボットや機械の制御や運動が、重力や摩擦の想定外の影響をうけて、現実世界での挙動を正確に再現できないことがあるのはそれゆえです。

ヒトの身体はまことに重要で、私たちは身体を通じて世界を感知し、他者や世界に働きかけ、そうした経験をつづじて「知性」を獲得します。だからこそ私たちは、自身の身体性を正しく理解する必要があります。楽譜をどんなに眺めてもピアノの上達が見込めないように、実際に身体を動かして環境と相互作用しなくては知識やスキルを磨くことができません。身体を用いるプロセスを経ずには、成長できないのです。

これから始まる大学院のキャンパスライフは、みなさんそれぞれの身体性を磨く、またとない機会です。キャンパスの外での活動も、身体性を向上させる絶好の機会となるでしょ

う。みなさんには、教室や実験室の中で勉強や研究にはげむことはもちろん、キャンパス外の環境にも身をおいて、現実の世界に体で触れていただきたいと思います。

他者との関係性における身体性の意味を理解するうえで、ヒトが情動を大切にしていることも忘れてはならない論点でしょう。一方、AIはヒトの感情を、ヒトがやるような方法で理解したり、共感したりすることはできません。

先ほど「AIにもカウンセリングができる」可能性に触れましたが、AIが身体性に乏しいことは、大きな制約です。他者との対話においても、相手と同じ空間に居あわせ、向かいあうことで、はじめて成立する対話は少なくありません。時間と空間の共有は、インターネットや電話などオンライン上での情報交換とは異なり、一定の連帯感を生じさせます。これは身体という制約のうえにこそ生まれる関係性です。AIが下す判断が、ヒト社会における倫理感とかならずしも一致するとは限らない事実は、このあたりとも深く関係してくるでしょう。

「速く走る」ことでは、ヒトの能力は自転車や自動車には及びませんが、マラソンや100メートル走などの陸上競技において、選手たちが限界に挑む姿はヒトの興味を惹きつけます。ヒトには、ひとつの機能的な優劣では語れない、固有で複雑な魅力を感じる能力があるのです。AIがヒトを凌駕するようになった将棋やチェスも同じです。AIに比べればヒトは記憶も不十分で計算も遅く、劣っているように見えるかもしれませんが、ヒトは将棋をやめません。「AIにはかなわないから」とやめてしまわないのは、勝敗の結果に還元されない、将棋というゲームのプロセスを楽しむことができるからです。AIは、どれほど華麗な手を指しても、将棋を楽しんでいるわけではありません。楽しみや喜びの経験は、苦しみや怒りの感情と同様、ヒトの

知性をはぐくむ重要な機会であり、原動力です。

ヒトとAIは異なる存在です。AIがヒトのように創造的に振る舞うことより、ヒトがAIのように機械的に振る舞い、割り切ってしまうことのほうが、はるかに危ういことです。両者の振る舞いが異なるからこそ、相互に補完しあう関係が可能になります。

私は大学院時代に、自律型海中ロボット(AUV: Autonomous Underwater Vehicle)の研究をしていました。このロボットは暗く冷たい海の中で、何十時間も作業をつづけられます。これに対して遠隔操縦型のロボット(ROV: Remotely Operated Vehicle)の場合には、操縦者が必要です。何十時間も作業の間、操縦者がずっとはりついでなければなりません。自律型の場合、誰かがはりついでいる必要はないかわりに、われわれはその仕事を信じて待つ必要があります。ここでヒトとAIやロボットとの関係性に、これまでなかった多様なありかたが生まれます。すなわち、遠隔操縦型では、おおむねヒトの操縦の通り従属的にロボットが動き仕事をこなすのに対し、自律型では、オペレーターのおおまかな指示のもとで、ロボット自身が自律したシステムとしてタスクを実行することになります。自律的だからこそ、対話が必要になります。実際、私が博士課程のときに創った自律型のロボットは、私自身がダイバーとして水中で作業を確認し対話したかったので、簡単な通信を可能にするための発光パネルを装備していました。

当時、私が読んだ本のひとつにCarnegie Mellon大学のロボット研究者であるHans Moravecが書いた*Mind Children*という本があります。この本は1988年に書かれたものですが、当時すでにMoravecは、「コンピュータがこの本を書くことができたなら、そ



して私よりも上手く研究を行うことができたから、どうするだろうか?」という疑問を投げかけ、多くの職業が脅威にさらされる可能性を指摘しています。さらに地球外の場所においてヒトの知能と機械 (machine) が高度に融合した存在が post-biological world を形成する、というストーリーをも描いています。そこでは、現在、まさに議論がなされている AGI (Artificial General Intelligence) に近い発想として、人類の多様な知が集積される Superintelligence にも言及しています。まだインターネットも普及していなかった時代に、ロボティクスをこえて、半導体やソフトウェアシステム、人類の宇宙への進出、ヒトの進化と DNA など、多岐にわたる最新の知見と最先端のテクノロジーをふくみこんだ俯瞰的かつ自在な構想力に、当時、大いに刺激を受けたことを思い出します。

みなさんもまた、新しい技術の力を用いて世界に貢献してゆく時代を生きることになるでしょう。AI はもちろんのこと、今後あらわれる革新的なテクノロジーについても、つねに理解を深め、ヒトとのかかわり方に思いをめぐらせる努力をおこたらないでください。

どのような革新的なテクノロジーも、技術は手段であり、目的ではありません。その目的や手段が、ほんとうに望ましいものであるかどうかを判断するのは、私たちヒトです。自分にとって、私たちにとって、そして地球と人類社会の未来にとって、望ましい選択なのか。みなさんには、それを問いつづけてつづき、行動する創造的地球市民になっていただきたいと思います。

これから、みなさんの大学院生活という新

しい航海が始まります。学ぶことは、孤独で厳しいだけの航路ではありません。友人、家族、教職員をはじめ、多くのサポーターがみなさんを支えています。東京大学もまた、みなさんがその未来を築くための最良のパートナーとなり、応援者となることを約束します。みなさんそれぞれの力を存分にのばし、明るい未来を築く道を、ワクワクしながら進んでいただきたいと思います。東京大学の大学院へようこそ。みなさんの入学をお祝します。



薬学系研究科長

浦野泰照



ニューヨーク・カーネギー財団理事長

Louise Richardson 様

入学生総代宣誓



経済学研究科

丹後咲杜 さん

本日は、素晴らしい入学式を挙げていただきありがとうございます。私が東京大学に入学した4年前、パンデミックの影響で入学式は開催されませんでした。コロナ禍を乗り越え、皆さまの前で入学式に出席できていることを本当にうれしく思います。入学生を代表し、僭越ながら、お礼申し上げます。

さて、近年、「日本は格差社会だ」という声を時折耳にします。確かに、日経平均株価が史上最高値を記録し、大企業で記録的な賃上げも相次ぐ中で、中小企業の人々はその好影響を実感できていないようです。また日本の相対的貧困率は15%を超え、特にひとり親家庭の子どもは半数近くが貧困下にあるのが現状です。

一方で、トップ1%の富裕層が保有する資産の割合は、2019年時点の最新値ではOECDの中で4番目に低く、日本における富の独占は相対的に深刻ではありません。また所得の不平等度を表すジニ係数は、再分配後で見ると若干の下降傾向にあり、再分配後の所得格差の拡大はあまり起きていないといえます。このように、

「格差」という問題を一つとっても、その見方によって印象は180度変わります。決して、答えは一つではありません。

私たちがこれからの研究生生活で直面する問題は、まさにこのようなものばかりです。学部までの勉強と違い、一つの問題に一つの答えがあるケースはまれです。一つのデータ・価値観に基づいて答えを決めつけてしまうのではなく、様々な角度から問題をとらえ、答えを追究する姿勢を、決して忘れてはなりません。

よって、ここに入学生を代表して宣誓します。

これから私たちは、たくさんの壁にぶつかっても決して逃げることなく、むしろ自ら、より困難な壁を、より多く登ることを誓います。そして、自分を信じて、何が起きても恐れず、乗り越えることを誓います。コロナ禍を克服し、念願の入学式に臨むことができた今、改めてそんな思いを強く感じています。

最後に、これからの研究生生活を、ここにいる最高の仲間と送れることに感謝して、宣誓の結びといたします。

SOGI ⇒ Sexual Orientation and Gender Identity ガイドラインについて 教えて、森山先生!

2月8日に公表された「東京大学における性的指向と性自認の多様性に関する学生のための行動

ガイドライン」。このガイドラインを策定した経緯、議論、そして学内外からの大きな反響などについて、昨年4月に発足したガイドライン検討ワーキンググループ(WG)の座長を務めた森山工 理事・副学長に話を聞きました。



理事・副学長

森山 工

※昨年4月に立ち上げられた、森山先生を座長とする検討ワーキンググループのメンバーは、ダイバーシティ教育担当の伊藤たかね副学長(情報学環)、KOSS(駒場キャンパスSaferSpace)を立ち上げた清水晶子先生(総合文化研究科)、学生相談所所長の高野明先生(相談支援研究開発センター)、多様性やマイノリティなどを研究している総長補佐の額賀美紗子先生(教育学研究科)の5名でした。

※ガイドラインは「1.趣旨説明(付「基本用語の解説」)」「2.SOGI関連 大学生活上で直面する典型的な障害の例」「3.諸手続き・授業・学生生活」「4.おわりに」の4部構成となっています。



最小限の文面でしたが、ガイドライン策定を報じた2月8日のXのポストは、本アカウント史上歴代2位となるインプレッション数を記録。大きな注目を集めました。SOGIに関するガイドラインの発表は東大が特に早かったわけではありません。筑波大学や大阪府立大学や大阪大学などは、すでに2017年の時点で同様のガイドラインを発表していました。

きっかけは学生の声

——策定までの経緯を教えてください。

発端は学生からの声でした。毎年教養学部
の学生から「戸籍名ではなく通称名を使いたい」という要望があるのですが、その手続きを制度的にもう少し使いやすくしてほしいという声がありました。これは教養学部だけではなく全学の問題なので、学生支援担当の藤垣裕子理事とダイバーシティ担当の林香里理事に相談し、ご検討いただきました。その結果、通称名だけではなく、性的指向や性自認の多様性を推進する方向で検討したほうが適切であるということになり、学生向けのガイドラインを策定することにしました。私は昨年3月まで教養学部長としてこの課題に取り組んでいたのですが、昨年4月に執行役になった時にWG*の座長を務めることになりました。

——WGではどんな議論がありましたか？

最初に決めたのはガイドラインの骨組みです。一般論的な導入部分があり、その後に現実に学生が直面し得るような事例集、東大が提供している情報や相談窓口などの紹介、最後に一般論に戻るという構成*です。一般論の部分は私のほか、伊藤たかね先生と額賀美紗子先生が担当しました。事例集は清水晶子先生と高野明先生です。お二人は実際の学生の動向をよくご存じなので、具体的でヴィヴィッドな例が出てきました。WGでは、皆で相互に学習し合いながら議論を組み上げました。その過程で、私の考えには「アンコンシャス・バイアスが入っている」と自覚させられることもあり、目から鱗が落ちる感じでした。

原案ができた段階で、15の教育部局を個別に訪問し、部局長などに原案を見せて意見を伺う「部局キャラバン」を行いました。多様な意見がありました。特に多かったのが、

東大の女性教員や学生の比率を高めるための女性限定の支援策が、SOGI多様性の推進と相矛盾するのではないかという意見です。これは何らかの形で説明する必要性を感じたので、「おわりに」に書きました。

また、昨年11、12月に行った意見公募には延べ230件ほどの意見が集まりました。その約9割は学生からのものでした。概ね好意的でしたが、批判的なものもあり、理があると思える意見に対しては、文章の加筆修正など、こちらからのリアクションを入れました。

通称名使用手続きを簡素化

——発端となった通称名使用の手続きは変更されましたか？

根本的に簡素化しました。これまで通称名を希望する学生は、学生相談所と保健センター精神科のそれぞれから確認書をもらう必要がありました。それを所属学部・研究科等の教務課や学生支援課に提出し、手続きに入るという流れです。ですが、通称名使用の希望は精神の病とは関係がなく、また学生相談所での確認は形式的なものだったので、この2か所での手続きは廃止しました。現在は、希望する学生が書式に記入し、確認項目にチェックを入れたものを所属部局に提出すると、承認のプロセスが始まります。

性別情報の必要性についても議論しています。大学入学共通テストの段階で性別を記載し願書を出す必要があります。その性別情報は二次試験まで、あるいは入学後の学籍簿にも引き継がれます。その性別情報をどこで断ち切れるのか。学生を「管理する」ために性別が必要ないなら、入学手続きの際に性別欄をなくす、あるいは、「男性女性どちらでもない」「答えない」という選択肢も設けるなどということも考えるべきだという議論を始

めています。

学内外からの強い関心と批判

——非常に具体的な障害の例がSNSなどで大きな反響を呼びました。

想定をはるかに超えた反応で驚きました。最初は好意的なものが多く、時間が経つと批判的な意見が出てきたと認識しています。ただ、批判的な意見も含めてこれだけ議論を呼び、話題になったこと自体に大きな意味があると思っています。

学内の意見公募もそうでしたが、多かったのは「こんなことまで規制されるのか」という意見です。これについては趣旨説明の部分に書きましたが、あくまで本学の方向性を示した「ガイドライン」であって「規則」ではないことが重要です。また、「おわりに」にあるように、「人に対して何も言わなければいい」という風土が生まれるのは望ましくありません。「萎縮する」ことは危険を伴います。UTokyo Compassの基本にすえた「対話」の重視にもそぐわない。萎縮するのではなく自分を他者に開いてオープンな議論をする、対話を続ける、ということが大事です。これに対して「萎縮することもできないのか」という反対意見があったことは明記しておきたい。

——SOGIは「すべての東京大学構成員にかかわる」ことだと記していますね。

そこは極めて重要な点です。性的指向と性自認の多様性は、LGBTQ当事者の問題だと思ってしまうと、該当しない人は「読む必要がない」と考えるかもしれません。ですが、どのような性的指向、性自認を持つかというのは、本学構成員だけでなく全ての人に関わることです。誰一人当事者でない人はいません。みなさんに読んでいただきたい。

——関心がない人に読んでもらえますか？

学内意見公募や公表の際、学生にはUTASを通じた周知を図りました。URLをクリックすれば読めますが、読む読まないは最終的には個人の自由です。読後のレポート提出を課したり、読まないで進学できないなどと強制したりするのは、そもそもの趣旨にふさわしくない。今後は入学手続きとタイアップするなどして周知していきたいと考えています。ガイドラインも一定期間置いたら見直しを行い、適宜事例を加えたり、あるいは表現を変更したりしてアップデートしていく予定です。

SOGI関連

※一部省略あり（ガイドラインを参照ください）

大学で直面する典型的な障害の例



教員が講義やゼミにおいて：

- 名簿掲載名から性別を推測したグループ分けをしたり、「男子」「女子」としての発言や行動を期待したり要求したりする。
- 名簿や外見から推測される性別に従って呼称の使い分けをする（「～さん」「～くん」の使い分け）。
- 「今どきは『世の中には男と女しかない』と言ってはいけないんだね」と、性の多様性について暗に揶揄する。
- 「男子はみんな彼女が欲しいだろうけれど」などのバイナリーかつ異性愛を前提とした発言をする。
- 「この研究者は私生活ではコッチの人だったんだよね」「特殊な性癖があってね」など、同性愛差別的な発言をする。
- 「最近ではLGBTQとかいう人たちもいるんですね」と、自分は無関係である風を呈示して、LGBTQ当事者が自分たちとは異質な「他者」であるようにふるまう（LGBTQ当事者の「他者化」）。
- 「人間には体の性と心の性がある」「日本は伝統的に同性愛に寛容で」など、通説のように受けとめられていながらも、現時点では学術的に不正確とされている内容を授業で発言する。
- 情報共有やファシリテートが不十分なまま、差別発言が出ることが容易に予想されるトピックで、学生同士に議論や討論をさせる。

事務職員が窓口対応等で：

- 本人の同意のないまま指導教員や授業担当教員に「登録学生が氏名を変更したいそうです」などと個人情報を共有する。
- 事務手続きで、性別について男性か女性かしか選べないことが当然であるような態度を取る。
- 周囲に聞こえるほど大きな声で「性別変更の手続きですね」「健康診断に個別配慮が必要ですね」と聞き返す等、配慮が乏しい対応をする。

学生同士の関係の中で：

- 「彼氏いないの？」「好きな女性のタイプは？」「イケメンなのに彼女ができないの？」等、バイナリーかつ異性愛を前提とした発言を行う。
- 「心が女なら自分も女子トイレに入れるよね」というなど冗談を装い、間違った情報とともに差別する。
- オリエンテーションの時期の自己紹介に出身高校を含めるように設定したり、他の人の出身校情報を勝手に公開したりする（トランジションしている学生にとってはアウティングにつながる可能性がある）。
- トランスジェンダーの学生に「普通の人と変わらないように見えるから大丈夫」と（励ますつもりでも）否定するような反応をする。
- サークルやゼミの合宿などの活動で、個別の事情に配慮せず、安心できる部屋割りや入浴に関する情報提供がなかったり、必要があれば宿泊に関する配慮を希望可能なことをあらかじめ明示しなかったりする。
- 同性同士で撮った写真や、仲の良い同性同士を指して「できてるんじゃない？」等と、同性愛を揶揄する。
- 「LGBTQは生理的に受け付けない」「女性のように振る舞う男性は気持ち悪い」「お前がホモだったら友達やめる」等、LGBTQを嫌悪・侮蔑・嘲笑の対象として取り上げる。
- SNSなどに、他人のSOGIに関わりうる情報（場合によって、出身校、所属サークル、付き合っている相手などが含まれる）を勝手に書く。
- 相手の同意を得ずに、カミングアウトした相手の性自認・性的指向を第三者に知らせる（アウティング）。

その他の関係の中で：

- カミングアウトした際の、「一時の気の迷いだ」といった非受容や拒否の態度。また、「いつか治ると思っている」といったことばのように、当事者の状況が「治し」（「治療」）の対象であるかのように捉えることで非受容や拒否を突きつけてしまう態度。



海と希望の学校 — 震災復興の先へ —

第31回

大気海洋研究所と社会科学研究所が取り組む地域連携プロジェクト——海をベースにローカルアイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み——です。東日本大震災からの復興を目的に岩手県大槌町の大気海洋研究所・大槌沿岸センターを舞台に始まった活動は、多くの共感を得て各地へ波及し始めています。

海と希望の学校が創り出すもの

大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センター長／教授 **青山 潤**



①観光地域づくり法人による海の生き物観察実習において、釜石市根浜海岸で子供たちに解説する大土直哉助教。②大槌町の団体が企画した吉里吉里海岸での地質学講座で解説する山口飛鳥准教授と松崎賢史助教。③社会連携本部主催の体験活動プログラムで、一般社団法人おらが大槌夢広場の神谷未生代表から大槌町に残る明治三陸(左)と昭和三陸(右)の津波伝承碑の説明を受ける参加学生。④震災時に避難所となった大槌町吉里吉里・吉祥寺のご住職から当時の様子うかがった。

第6期科学技術・イノベーション基本計画に掲げられた「総合知」という言葉をよく耳にするようになりました。様々な知の結集と活用を呼びかける重要かつ素晴らしい概念であることは容易に想像できます。しかし、その具体的な部分となると、これまで指摘され続けてきた文理融合や社会連携などの明確な違いがはつきりしません。もし文理融合や社会連携の重要性が、言葉を変えて指摘され続けているのだとすれば、それは十分要請に応えることのできていない研究界に対する社会からのメッセージと言えるでしょう。海洋生物学研究者である私自身、例えば生物・環境保全を目的とした環境保護団体などとの共同研究は、文理融合であり、社会連携であると考えていました。しかし、「海と希望の学校」に取り

組んでみて、これは極めて小さなコップの中の話に過ぎなかったと反省しています。

そもそも、海と希望の学校のベースである「希望学」を始めたのは、社会科学研究所の経済学や歴史学、政治学などを専門とする研究者であり、当然ながらそこに「希望」の専門家はいませんでした。希望学は、参画した研究者が、まさに手探りで切り拓いてきた道だと言えます。海と希望の学校もこれと同じです。すでに「希望」の専門家である社研という心強い味方こそありますが、絶対的な正解があるわけではないことをよく知る彼らは、あくまでも皆で考えるというスタンスを崩しません。そもそも社研の研究者にとっても「海と希望」は初めてのチャレンジです。当然のことながら、大気海洋研

究所はもとより、連携している三陸沿岸の自治体や企業、民間団体にも「海をベースとしたローカルアイデンティティの再構築を通じて地域に希望を育む」専門家など皆無です。いわば素人集団が、社研のアドバイスを得て進めているのが「海と希望の学校」なのです。

この「参画する人間が素人ばかり」ということが、我々の連携に力を与えているように感じます。これまでの学際や文理融合を謳う共同研究などを振り返ってみれば、全体を主導する核となる研究分野があって、ここから離れた参画者ほど、立ち位置やモチベーションを見つけづらいという状況があったように思います。しかし、誰一人専門家がいなくなれば、参画者は等しく自分の考えること、できることを提案できます。また、無闇に使うことは無責任の誹りを免れませんが、素人であるがゆえ「わからない」と言える強みもあります。仮にも自分の専門分野であれば「わからない」ということには大変な勇気が必要であり、周りもまた専門家だから何か重要なこと言うだろうと期待します。この時に発した一言が正しければまったく問題ありませんが、「余計な一言」で全体の活力を大きく削ぐといえ、どなたも多少なりとも思い当たる経験をお持ちではないでしょうか？ 参加している様々な属性の人たちが、等しく「わからない」というカードを持ちつつ、それぞれの知識や経験、アイデアを披露できる環境は、とても楽しく、前向きなものです。

もしかすると、社会が求めている文理融合や社会連携とはこんなものであり、「海と希望の学校」から創り出される知識は「総合知」の一つと言えるのかもしれませんが。

「海と希望の学校」は、奄美の仲間たち^{*}と共に、震災復興の先へ踏み出しています。



「海と希望の学校」公式 X (@umitokibo)

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）



^{*}本誌1579号の本欄参照

ぶらり 構内ショップの旅

第23回

やよい軒 @本郷キャンパス の巻

お腹を満たす和定食と和菓子

昨年12月、東大病院1階にオープンした定食レストラン「やよい軒」。明治時代に創業者が営んでいた西洋料理店「彌生軒」が店名の由来です。株式会社プレナスが全国に約360店舗展開する和食チェーン店ですが、病院内に店を構えるのは初めてです。

定食や麺類、丼などのメニューの中でも、東大病院店で特に人気があるのが、豚のバラ肉を特製の生姜ダレで炒めた「生

姜焼き定食」(¥730)。そして南蛮ソースで味付けされた鶏もも肉にタルタルソースがかかった「チキン南蛮定食」(¥910)と定番の「唐揚げ定食」(¥790)です。

全てにご飯(+¥30でもち麦に変更可)と冷ややっこ、味噌汁が付きます。セルフサービスカウンターにある無料の漬物と温かい鰹ベースのだし汁をご飯にかけ、「だし茶漬け」にして楽しむ人も多いか。店内では配膳係として2台のロボットも稼働しています。

また新たな試みとして、東大病院店ではデザートも展開しています。これまで提供してきたアイスクリームを使ったサンデーなどの冷菓に加え、3月には和菓子が登場しました。「お客様から温かい甘味が食べたいという声をたくさんいただきまして、メニューを新しくしました」と話すのはプレナスの平出明広さん。北海道産のあずきを使った「焼き餅入りぜんざい」(¥350)や「和風黒蜜ワッフル」(¥560)など、食後のデザートや午後のお茶と共に楽しんでほしいと言います。「座席間の空間を広めにするなど、ご来店いただいたお客様がゆったりと落ち着ける空間づくりに注力して取り組んでいます。従業員一同、皆様のご来店をお待ち申し上げております」

※価格は税込



生姜焼き定食。テイクアウトは、事前にモバイルオーダーしておけば待たずに受け取ることができます。

●営業時間：10時半～17時 定休日：日、祝

<https://www.yayoiken.com/>



統括責任者の川添雅之さん(左)とシニアストアマネージャーの平出明広さん(右)

デジタル万華鏡

第40回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

農学生命科学研究科附属演習林
秩父演習林 助教

久本洋子

資料から垣間みる珍しい竹の開花

タケ類は古くから、タケノコは食用に、材は日用品や工芸品にと様々な利用されてきました。

1912年に刊行された『日本竹類圖譜』には主要なタケ類の枝葉やタケノコ、斑の入った材などが繊細な筆致と鮮やかな色彩で描かれており、



モウソウチクなどが描かれた美しい図版
→日本竹類圖譜 <https://x.gd/sWBjq>

当時のタケの利用価値の高さが窺えます。また、タケ類は普段は花を咲かせずタケノコを生やして増えますが、数十年に一度という周期で開花するという変わった植物です。偶発的に開花することはあるものの、通常花を見つけることは困難です。それにも関わらず、図譜には数種類のタケ類できちんと花が描かれており、植物学の観点からも重要な情報を含んでいます。

数十年に一度という開花周期は過去の文献の記録から推測した場合が多く、正確な周期を調べるためには、発芽したタケの芽生えを育てて、いつ開花するのかを数世代かけて確認する必要があります。千葉演習林には300年という長期計画で設置された「モウソウチク開花周期実証試験地」があります。この試験地において、1930年に発芽した個体が67年後にあたる1997年に開



1997年に開花したモウソウチク試験地
→画像データベース <https://x.gd/JnJXw>

花しました。67年周期が確かであれば、

次回の開花は2064年と予想されています。1997年当時の開花した竹林、花や芽生えの様子を撮影した写真は、当時の開花の様子を知ることができる貴重な研究資料です。

図譜および写真の画像はインターネット上で公開されていますので、珍しい竹の花や開花の様子をぜひご覧ください。これらの資料が後世に引き継がれることで、将来の竹の研究にも役立てられることを期待しています。

ワタシのオシゴト 第215回

RELAY COLUMN

宇宙線研究所
予算・決算係主任

矢崎 恵一

今まさに掘っています！



広すぎず相談しやすい事務室です

宇宙線研究所は比較的小規模でありながら、スーパーカミオカンデやKAGRA、CTA 大口径望遠鏡などの大型研究設備の他、国内・国外に複数の拠点を持っているのが特徴です。特に現

に進められているハイパーカミオカンデ計画については、高さ94m（安田講堂2つ分以上！）、直径69mという世界最大規模の人工地下空洞の掘削が今まさに行われており、議論に参加したり現場を視察したりと非常に貴重な体験をさせていただいています。

本所における業務については、柏地区共通事務センター各チームと協力しながら行われており、私自身の業務は所内の予算・決算業務を主に担当しています。特に予算業務に関しては上記の大型設備に関する予算もあるため、緊張感とともにやりがいがあります。

宇宙線研究所がある柏キャンパスは普段は静かな環境ですが、秋には1万人以上が来場する一般公開が開催されて大変賑わいますので、是非一度遊びに来てみてくださいね！



大学とは思えない規模の掘削現場です…

得意ワザ：ご飯（お米）をいっぱい食べること

自分の性格：マイペースだけど小心者

次回執筆者のご指名：鈴木耀さん

次回執筆者との関係：前々部署でお世話になった後輩

次回執筆者の紹介：安定感抜群で頼りになります！

蔵出し! 文書館

The University of Tokyo Archives

ぶんじょうかん



第49回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

「大森貝塚」をめぐる文書たち

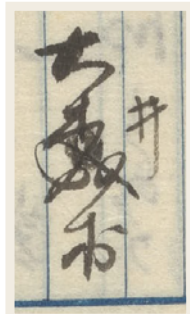
「柵内通行之節大森ステーション之近傍ナル鉄道線路ニ接近セル断崖ニ於テ稀在之古生物等ヲ発見いたし候」(S0004/10『諸向往復 明治十年分三冊之内甲号』)。有名な理学部教授モースによるエピソードですが、当時の文書を見てもう少し込み入った状況がみえてきます。

遺跡発掘をめぐる、モースには同じ東京大学のナウマンや、外交官で考古学研究に関心の強いシーボルトというライバルがいました。東京大学は上記の言をうけ、1877（明治10）年9月に東京府と鉄道局に発掘を申請しますが、モースが線路柵越しに遺跡を見たのは6月、文面には焦りがみえます。「右発見候ハ全ク同氏ヲ以テ初メ」で、伝聞から採掘を願出する者があっても状態保護の観点から「暫ク本部〔東京大学〕ニ」限るよう依頼しました。さらに原稿段階では「同氏ノミニ」とあり、当初はモースに限定するつもりでした。

その後、鉄道局の全面協力のもと発掘はすすみ、12月に天覧に供する成果を上げました。しかし同じ時期、鉄道局から報告が入ります。「午前八時十九分横浜出発上り列車ニテ外国人一名日本人兩名同道大森停車場ヨリ下車」し、発掘場所へ行きたいと告げたため、駅長は氏名と東大の身分証を求めたところ、その人物は拒否、何も言わず線路外から遺跡にむかい発掘を始めます。駅長は所轄外の場所でもあり「強テ差止め」るのも難しく、モースの採掘点ではない「近傍ヲ相穿」っていた旨を知らせました。東京大学はこの報に感謝し、今後も報告してほしいと返しています。さて、この外国人はいったい誰なのか…。

さてもう一点、「大森貝塚」の発掘地につき論争がありました（その名残に現在も2つの碑があります）。文書には当初「大森駅」付近であることから「大森発見古物」のように「大森」の地名が冠されました。しかし発掘場所は「大井村内字鹿島谷」とあり、隣の大井村域です（S0004/16『諸向往復 明治十一年分三冊之内丙號』）。この情報が交錯し、大学作成文書にも所在地「大森村」の誤記を「大井村」に修正したものが存在します。しかし上記の天覧の文部省通達には「大森村発見」とあり、次第に所在地情報が誤って伝えられる結果となりました。モースが線路内から発見し「大森駅」から発掘に行かなかったら、「大森貝塚」は「大井貝塚」だったのかも知れません。

（助教・秋山淳子）



インタープリターズ・第200回 バイブル

総合文化研究科教授
科学技術コミュニケーション部門 **梶谷真司**

コミュニケーションの中の科学技術

福岡県大牟田市に通称「ポニボニ」という団体がある。正式名称は「大牟田未来共創センター」で、原口悠さんと山内泰さんを中心に活動している。

彼らの活動の一つに、VR（ヴァーチャル・リアリティ）を活用したものがある。VR旅行の映像を介護施設の高齢者に見せて楽しんでもらうプロジェクトを進めている東京大学先端科学技術研究センターの登嶋健太氏の協力を得て、さらに大牟田市生涯学習課、地域の高齢者施設「延寿苑」、地域創生Coデザイン研究所、NTTと連携している。これは一つの産官学民の協働だと言えるが、その中身が面白い。

撮影をするのは、地元の元気なおばあさん、おじいさんたち。講習会を開いて360度カメラの使い方を覚える。最高齢は91歳である。大学生を含めて若い人たちも加わり、行き先も高齢者と相談し、一緒に撮影に行く—— 駅で新幹線を見送る、お寺でお参りをし、住職の話聞き、境内にいる猫に餌をやり、紙風船で遊ぶ、等々。自分で映したり映してもらったりした映像を若い人が編集して動画が完成する。



私が行った日は、おばあさんたちが実際にゴーグルをつけてお互いの作品を視聴し、動作確認をしていた。あとでみんな一緒に施設に行って利用者の高齢者に見てもらい、説明するらしい。時代を共にしてきた者どうし、思い出話で盛り上がる。施設の高齢者はとても喜び、撮影した人たちもうれしくなって、また撮影して見せたい。こうして元気に動ける高齢者も、外出することが難しい高齢者も元気になる。若い人も一緒に活動し、世代を超えたコミュニティが活気づく。

ここでVRはたんなる福祉に役立つテクノロジーではない。一人一人の力を引き出し、人と人をつなぎ、そこで個々の人が自らの存在意義を見出す触媒となっている。科学技術コミュニケーションというより、「コミュニケーションの中の科学技術」である。

しかもここでは、信頼できる関係が先にできていて、そこからみんなでアイデアを出して楽しみながら進めていくという、産官学民の見事な連携を見ることができる。

ききんの **き**

寄付でつくる東大の未来

第54回

社会連携本部渉外部門
アソシエイト・ディレクター

成田麻衣子

感謝をこめた紺綬褒章伝達式

皆さんは、紺綬褒章をご存知でしょうか。

紺綬褒章は、国の褒章制度のひとつで、公益のために多額の私財を寄付した方に授与される褒章です。表彰されるべき事績の生じた都度、内閣府が審査・決定をし、授与が行われています。東京大学では推薦要件に合致



紺綬褒章*

している方について、推薦をさせていただきます。

東大基金では、四半期毎に紺綬褒章受章者の方を本学にお招きし、受章伝達式として、ささやかなセレモニーを開催しています。

本伝達式は、本学役員からご寄付に対する謝辞、章記・褒章の伝達を行う他に、本学を取り巻く社会課題の共有、2027年に迎える創立150周年に向けての周年事業の取り組みのご紹介、本学の将来に向けた財務面でのご寄付の重要性などについて、直接寄付者の方と会談する貴重な機会となっています。受章者の方からは、ご寄付にこめられた想いや、本学へ期待されることなどのお話をおうかがいし、「日本の将来を担う学生達に充実した学びを得てほしい」「東京大学の研究教育の発展を願う」「(卒業生の方より) 母校に頑張ってもらいたい、これからも応援していきたい」といった趣旨のあたたかいお言葉をいただいています。

東大基金では、このようなかたちで寄付者への心からの謝意を示す場を持ち、毎回受章者の方にもご好評をいただいています。これからも、東大を応援し、支えてくださる多くの皆様と、本学にて紺綬褒章受章のお祝いが叶いますことを願っています。



2023年11月30日の伝達式にて、
褒章を手にした受章者の方々

伝達式の
様子→



東京大学基金事務局（本部渉外課）

※参照→内閣府 <https://x.gd/azHXM>

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
3月12日	本部環境安全課	第8回東京大学環境安全衛生スローガンコンテスト募集
3月12日	広報室	4月から東大のロゴマークが(ちょっと)変わります
3月13日	本部国際戦略課、工学系研究科・工学部	ラファエル・マリアーノ・グロッシー IAEA事務局長による講演会を開催
3月14日	人文社会系研究科・文学部	安藤宏 教授、菊地重仁 准教授の恩賜賞・日本学士院賞受賞が決定
3月15日	本部学務課	博士課程支援プロジェクト (SPRING GX) 学生急募
3月15日～	広報室	再エネの課題を解決し、「地球に住み続ける」 東大在学中に刺激を受け起業、9年で上場を果たす / Entrepreneurs 24-25
3月19日	総合文化研究科・教養学部	馬場雪乃 准教授がIPSJ/IEEE-CS 若手研究者賞を受賞
3月19日	総合文化研究科・教養学部	「駒場リベラルアーツ基金」寄付者銘板の除幕式を実施
3月19日	工学系研究科・工学部	工部大学校150周年記念シンポジウムを開催
3月19日	理学系研究科・理学部	理学系研究科 化学専攻の菅裕明教授が日本学士院賞を受賞
3月19日～	広報室	キノコとウンチと循環と——異分野研究者対談 ウンコが鍵を握るスラムの環境保全と貧困緩和＝中西徹 理想的なバナナウンチを目指した排便ケア＝高岡茉奈美 健康な人の糞便が病人の腸の機能を回復させる＝藤本康介 / 『淡青』48号「トイレと東大」
3月21日～	本部総務課	令和5年度東京大学学位記授与式を挙行 令和5年度東京大学卒業式を挙行
3月22日	医科学研究所	清野宏 名誉教授が日本学士院賞を受賞
3月25日	社会連携本部	2023年度 体験活動プログラム報告会を開催
3月26日	地震研究所	小原一成 教授が恩賜賞・日本学士院賞を受賞
3月27日	工学系研究科・工学部	沖大幹 教授が「ストックホルム水大賞」を受賞
3月27日	本部社会連携推進課	2023年度 フィールドスタディ型政策協働プログラム活動報告会を開催
3月29日	本部国際戦略課	UTokyo GNB First Online Meeting を開催
3月31日	大学総合教育研究センター	東大ナビ サービス終了のお知らせ
4月1日	本部広報課	令和6年度 部局長交代のお知らせ
4月1日	本部国際戦略課	東京大学グローバル・ナビゲーション・ボード (GNB) 初の対面会議を開催
4月2日	総合文化研究科・教養学部	「コマバのユータス」LINEスタンプ販売開始
4月3日	大学総合教育研究センター	東京大学フューチャーファカルティプログラム第22期 履修証授与式を開催
4月4日	教育学研究科・教育学部	2023年度 グローバル・リーダー育成、欧州研修プログラムを実施
4月4日	情報理工学系研究科	情報学に多様性を！「情報学 for all by all」を開催
4月4日	本部博物館事業課	IMT学生ボランティア募集
4月5日	工学系研究科・工学部	隈研吾 名誉教授が恩賜賞・日本芸術院賞を受賞
4月5日	本部情報戦略課	【注意喚起】東京大学を装った迷惑メール(なりすまし)にご注意ください
4月5日	広報室	能登半島地震と災害マップ——即時対応と継続的な支援のために



CLOSE UP 部局長交代のお知らせ

4月1日付で部局長の交代がありました。

	新部局長	前部局長
大学院薬学系研究科・薬学部	浦野泰照	三浦正幸
大学院数理科学研究科	平地健吾	斎藤 毅
大学院情報理工学系研究科	中村 宏	須田礼仁
大学院情報学環・大学院学際情報学府	目黒公郎	山内祐平
大学院公共政策学連携研究部・教育部	川口大司	飯田敬輔

	新部局長	前部局長
社会科学研究所	宇野重規	玄田有史
生産技術研究所	年吉 洋	岡部 徹
史料編纂所	尾上陽介	本郷恵子
定量生命科学研究所	白髭克彦	(再任)
宇宙線研究所	荻尾彰一	中畑雅行
附属図書館	坂井修一	(再任)

※新部局長の略歴と前部局長の退任挨拶は全学ホームページでご確認を。



●五月祭のお知らせ / 第97回五月祭が5月18日(土)・19日(日)に開催されます。今回のテーマは「しずく融け合う、水模様」。どの一瞬を切り取っても違う模様が描かれる水面のような祭の場に、一粒のしずくとなって飛び込みましょう!



CLOSE UP 8大学連携イベント「情報学for all by all」を開催 (情報理工学系研究科)



↑交流イベント。→会場に登場したマスコットISTyくんとオンライン会場の進行を担った須田礼仁研究科長

3月17日、国立大学法人8大学(旧7帝大+東工大)の情報系研究科が連携し、「女子も男子も、迷っているあなたにも、情報学を目指してほしいから!8大学同時共同開催 情報学 for all by all」を、オンラインと8大学キャンパス対面会場でのハイブリッド方式で開催しました。オンラインの共通セッションは、8大学から1名ずつが語るリレー方式。本学からは山肩洋子教授(情報基盤センター)が登場し、自身の研究と、研究者としてのキ

ャリアについて話しました。対面会場では、副研究科長の岩田覚教授と千葉滋教授による保護者・教員向けの説明会を対談形式で行いました。中・高生向けには、HASEKO-KUMA HALLラウンジを会場に、6専攻2名ずつの大学院生12名によるポスター発表や参加者と大学院生が交流する「ISTyくんとティータイム」を開催しました。参加者から届いた声も参考に情報理工学系研究科は情報学の多様性を実現するための活動に取り組みます。



CLOSE UP 「駒場リベラルアーツ基金」寄付者銘板を設置 (総合文化研究科・教養学部)



銘板と教養執行部の皆さん

「駒場リベラルアーツ基金」は、駒場ファカルティハウス(旧一高同窓会館)に寄付者銘板を設置しました。同基金は、駒場キャンパスにおける教育・研究活動の活性化を目的として2022年に設置され、これまで保護者、OB・OG、教職員のみならず、広く社会全体の皆さまから、2,650万円を超えるご支援をお寄せいただいています。この度、寄付者の

皆様へ感謝の気持ちと敬意を表するため、一括50万円以上のご支援をくださった方の銘板を掲示しました。「世界の誰もが来くなる大学」になるには、教育・研究の礎となるリベラルアーツ教育を担う駒場の充実が不可欠です。現在、教養学部1号館(時計台)改修と図書館II期棟建設に向けた「駒場未来プロジェクト」のご支援を募っています。



CLOSE UP 工部大学校150周年記念シンポジウムを開催 (工学系研究科・工学部)



当日の様子はYouTubeで配信されました

3月8日、HASEKO-KUMA HALLにて「工部大学校150周年記念シンポジウム」を開催しました。本学工学部の前身の一つである工部大学校の開校から150周年の節目を記念したものです。加藤泰浩工学系研究科長の開会挨拶に始まり、初代都検(実質的な校長)であるヘンリー・ダイヤーの出身、英国グラスゴー大学の教員をお迎えし、工学部長からのメッ

セージや講演をいただきました。駐日英国大使館マーガレット・タンク公使参事官にもご登壇いただき、大久保達也理事・副学長、中井祐教授、熊田亜紀子副研究科長からの講演がありました。2023年工学系研究科長賞(最優秀)を受賞した学生の講演もあり、研究成果の発表とともに将来に向けての抱負、後輩へのメッセージが語られました。

令和5年度学生表彰 東京大学総長賞受賞者



「課外活動、社会活動等」分野38件、「学業」分野27件の推薦の中から、学生表彰選考会議において慎重に選考審議を重ねた結果、総長大賞2件(表内◎印)、総長賞10件(大賞3件含む)が選出され、3月19日に本郷の小柴ホールにおいて授与式が行われました。皆さん、おめでとうございます。

【課外活動、社会活動等】

仁宮洸太(薬学系研究科博士4年)◎	新型コロナウイルスクラスター対策班における自治体公開情報を用いたCOVID-19データベースの構築
桑原嵩佳(理学系研究科博士3年)	高校生への研究指導活動における国際的に卓越した実績
川崎莉音、江森百花(#YourChoice Project)	地方女子の大学進学を取り巻く社会課題の解決に向けた取り組み

【学業】

大古一聡(情報理工学系研究科修士2年)◎	1次勾配情報に基づく学習問題の統計的・計算量的解析
末神奏宙(工学部4年)	画期的なゼロ知識証明技術と秘密計算技術の開発および国際コミュニティにおける活動
鎌倉啓伍(文学部4年)	書記言語の社会的意味:北イタリアのスロヴェニア語レジア方言を例に
荒木裕太(総合文化研究科修士2年)	トゥースイー版「アルマゲスト」(Tahrīr al-majistī)の研究と展望
西村幸浩(教育学研究科博士課程・令和6年1月修了)	日本の死刑制度に対する態度の規定要因に関する実証研究
高田(金田)真悟(工学系研究科博士3年)	スピン軌道相互作用の強いオールエビタキシャル強磁性酸化ヘテロ構造におけるスピン流-電流変換と磁気輸送現象
山口空(農学生命科学研究科博士3年)	バイオエコノミーおよび炭素社会構築の鍵酵素「セルラーゼ」の反応機構



本郷建物柄フリクション登場!



¥1,100(税込)

みなさま「消したいもの」はありますか?山積みの仕事?贅肉やニキ跡?昨日の失言や黒歴史?あの日生まれた恋心...!?ボールペンで書いた字が「消せる」でおなじみのフリクションに本郷建物柄が登場しました!

安田講堂・赤門・図書館など本郷を象徴する建造物が可愛らしくデザインされています。仕事で使えばテンション上がること間違いなし。お揃いの柄のクリアファイル、ハンカチ、シャーペン等と合わせてお使いください!(坂)

UTCCからのお知らせ utcc.u-tokyo.ac.jp





正門を出発、赤門から帰還

工学系研究科で燃料電池の電解質膜を作っていた筆者が、現在の専門である経済学、特に医療経済学に興味を持ったのは、アメリカ留学中にたまたま胃カメラを受けたことが発端だった。当日は受付で20ドル払ったのみで、日本の医療制度に慣れていた身としては、何の疑念も抱かなかつたが、これは完全な間違いだった。1カ月もしないうちに検査をした何とかラボ、麻酔科、胃腸科等々、高額請求のラブレターが次々と届き、郵便受けを開けるのが毎日恐怖だった。

一方で、夏休みに日本で実家近くのクリニックに行くと、自己負担は3割で、ある程度の金額以上は負担しなくてよい高額療養費制度もある。ただし、2時間待ちとかはざらで、ベルトコンベアに乗せられたかのように機械的に診察されることは日常茶飯事だ。博士修了後に就職したカナダのプリティッシュコロンビア州は、日本よりももっと極端で、基本的な医療は全部タダ、2020年1月からは納める保険料も無料。ただし、生死に関わらない限り、診察してもらうのにも一苦労だ。

どの国の制度も一長一短であり、これがベ

ストといえる類ではないが、異なる制度を実際に自らで経験したからこそ、もっと理解を深めたいという思いから生涯の研究テーマとなった。ありきたりだが、若い人には短期間でも良いので海外で（旅行ではなく）実際に生活してみたい。「相対的に」他と比べることで初めて、自らの置かれている環境や文化を理解できる。定刻なんて概念が存在しない国がほとんどの中で、電車が5分おきに時間通りに来る日本が決して当たり前ではないと感謝する一方で、30秒でも遅れたら壊れたラジオのようにひたすら謝罪する車内放送に、ここまで必要なのか、と思うようになるかもしれない。

ちなみに今年めでたく20周年を迎える公共政策大学院には留学はもちろん、国内でも様々な国々やバックグラウンドの人々と交わる機会が豊富にあり、学びの場として超オススメだ（笑）。

重岡 仁
(公共政策学連携研究部)

